

42671

教科書文庫

4
810.
5(-1943)
26006 27621

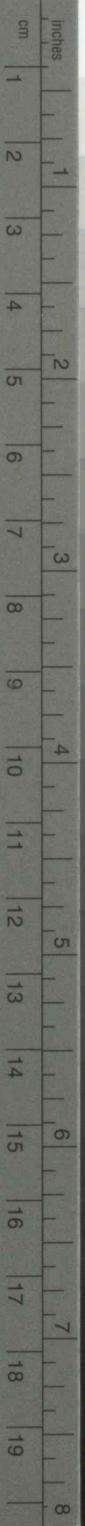
S-18  
1943

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



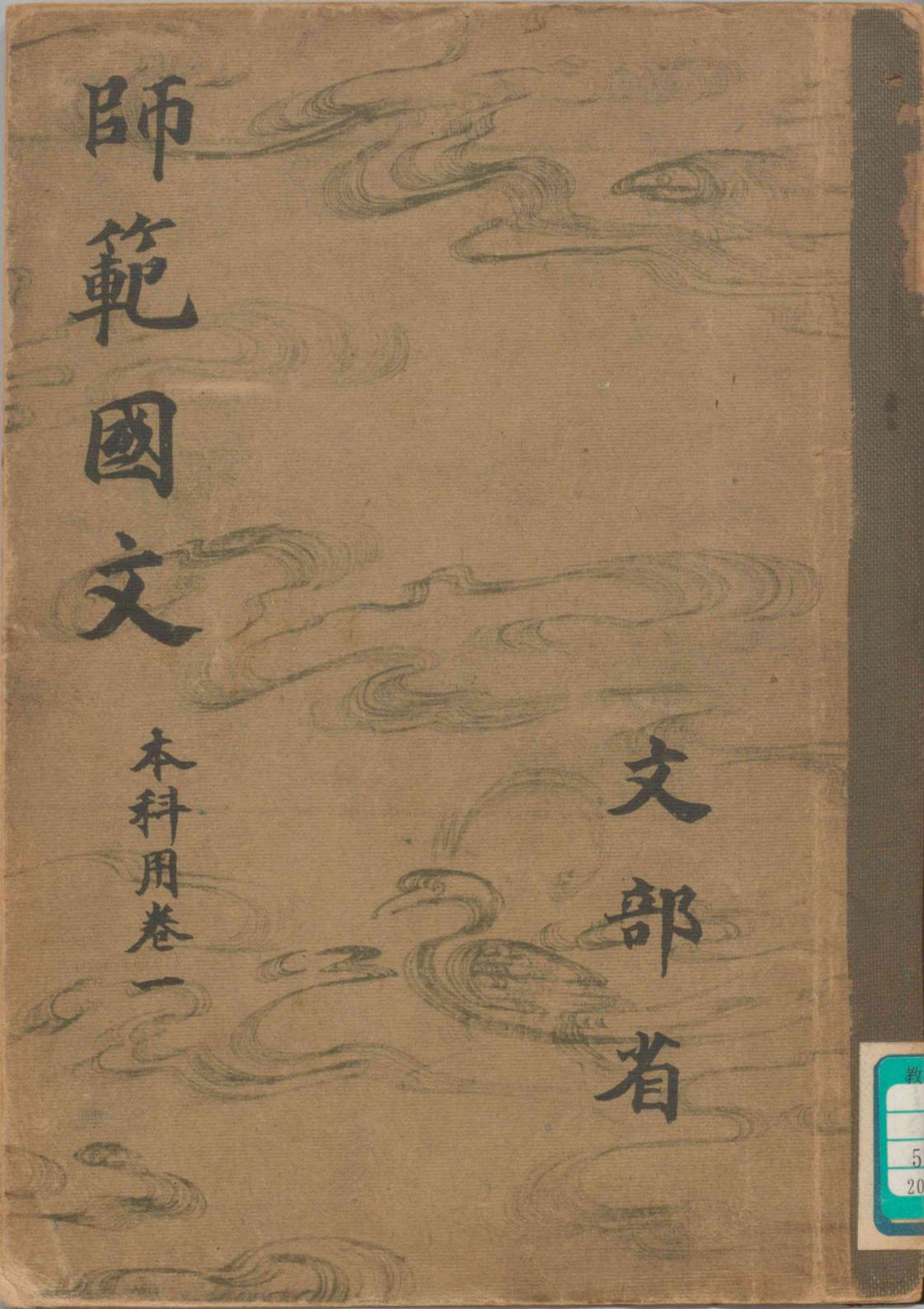
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

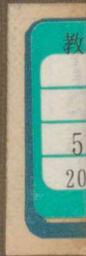
© Kodak, 2007 TM: Kodak



師範國文

本科用卷一

文部省



教科書文庫  
4  
810  
51-1943  
2000027621

資料室

3759  
Mo14

師範國文

文部省

本科用卷一

広島大学図書  
2000027621  


廣島大學  
圖書印



雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

東ラセ  
天白皇

素直大長谷朝原宮云々  
天和國政上郡宮飯谷是也

天皇御製歌 興毛與呂毛

本末  
神事也  
佛王使連司命  
氣天母胎而回  
行唐言以四  
号唐貝津大知  
之國天磐舟島  
也見古事記序

龍毛與美龍母乳布久思毛與美夫君志持  
此岳介萊採須兒家古閉名古沙根虛見津  
山跡乃國者押奈戸手吾許曾居師若倍手  
吾已曾座我許者背齒古目家呼毛名雄母

高市宮本宮御宇天皇代

神事天皇  
天皇

目次

前篇

一 おほみうた ..... 一

二 神にしませば ..... 八

三 みたみわれ ..... 三五

四 きよきその名 ..... 三

五 とほのみかど ..... 五

六 しこのみたて ..... 六

七 ふじのたかね ..... 六

八 くさぐさの歌 ..... 八

目次

一

後篇

一	源實朝	一九
二	契沖	101
三	賀茂真淵	104
四	鹿持雅澄	116
五	佐久良東雄	117
六	橘曙覽	114

(前篇初句索引)

前篇

- 一、寛永版本を底本となす。
- 一、異體文字は通行の文字を用ふ。
- 一、本文は二段組となす。上段に訓み下し文を、下段にその原文を對照して示したり。なほその參考とすべきものは、細字一段組としておほむね訓み下し文を掲げたり。
- 一、頭註の中、○と標したるものは事項の註記又は理解の參考に資すべきものを示す。
- 一、頭註の中、・と標したるものは、文字の校訂又は本文に關する參考すべき説を示す。校訂の記載は當該文字を掲げ、下に依據せる諸本を略號にて示し、次に底本の當該文字を掲げたり。
- 一、諸本の略號は左の如し。

藍	藍紙本	尼	尼崎本
金	金澤本	元	元曆校本
類	類聚古集	古	古葉略類聚鈔
神	神田本	西	西本願寺藏本
細	細井本	矢	大矢氏舊藏本
京	京都帝國大學本		



○歴代御製。  
(御製に唱和し奉るものを添ふ)

一 おほみうた

舒明天皇

天皇、香具山に登りて望國し給へる時、

御製の歌

大和には むら山あれど とりよろふ  
 天の香具山 登り立ち 國見をすれば  
 國原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ  
 うまし國ぞ あきつ島 大和の國は (卷第一)

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具  
 山 騰立 國見乎爲者 國原波 煙立龍  
 海原波 加萬目立多都 恰何國會 蜻島  
 八間跡能國者

天武天皇

天皇、吉野宮に幸せる時、御製の歌

一 おほみうた

天皇幸于吉野宮時御製歌

淑人のよしとよく見てよしと言ひし芳野  
よく見よよき人よく見つ (卷第二)

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉  
見與 良人四來三

紀に曰く、八年己卯五月庚辰朔甲申 吉野宮に幸す。

紀曰。八年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮。

持統天皇

天皇の御製の歌

天皇御製歌

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天  
の香具山 (卷第二)

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有  
天之香來山

元明天皇

和銅元年戊申、天皇の御製の歌

和銅元年戊申天皇御製歌

丈夫の鞆の音すなりものふの大 臣  
楯立つらしも (卷第二)

大夫之 鞆乃音爲奈利 物部乃 大臣  
楯立良思母

御名部皇女奉和御歌  
吾大王ものな念ほしすめ神の嗣ぎて賜へる吾なけなくに (卷第二)

元正天皇

御製の歌一首

御製歌一首

橘のとをのたちばな彌つ代にも我は忘れ  
じこの橘を (卷第十八)

多知婆奈能 登乎能多知波奈 夜都代爾  
母 安禮波和須禮自 許乃多知婆奈乎

○難波の宮にまし  
ましし時の御製。

河内女王歌一首

多知婆奈能 之多泥流爾波爾

佐可彌豆伎伊麻須 和我於保伎美可母

粟田女王歌一首

都奇麻知且 伊徹爾波由可牟

安加良多知婆奈 可氣爾見要都追 (卷第十八)

右件歌者在於左大臣橘卿之宅肆宴御歌并奏歌也。

後追和橘歌二首

等許奈物能 已能多知婆奈能

伊夜氏里爾 和期大皇波 伊麻毛見流其登

一 おほみらた

・歌一首(西「歌」)

大皇波 等吉波爾麻佐牟 多知婆奈能 等能乃多知波奈 比多底里爾之氏 (卷第十八)

右一首大伴宿禰家持作之。

聖武天皇

○天平四年八月

天皇の、酒を節度使の卿等に賜へる御

歌一首并に短歌

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌

食國の 遠の朝廷に 汝等し 斯く罷り  
なば 平らけく 吾は遊ばむ 手抱きて  
我は在さむ 天皇朕が うづの御手以ち  
かき撫でぞ 勞ぎたまふ うち撫でぞ  
勞ぎたまふ 還り來む日 相飲まむ酒ぞ  
この豊御酒は

食國 遠乃御朝廷爾 汝等之 如是退去  
者 平久 吾者將遊 手抱而 我者將御  
在天皇朕 宇頭乃御手以 搔撫會 爾  
宜賜 打撫會 爾宜賜 將還來日 相飲  
酒會 此豊御酒者

反歌一首

大夫之 去跡云道會 凡可爾 念而行勿

大夫之伴

右御歌者或云太上天皇御製也。

丈夫の行くと云道ぞおほろかに思ひて行  
くな丈夫の伴 (卷第六)

○太上天皇一元正  
天皇

右の御歌は、或は云ふ、太上天皇の御製  
なりと。

○冬十一月一天平  
八年

・左大辨(元)、「左  
大臣」

・橘者(元)、「橘  
花者」

冬十一月、左大辨葛城王等に姓橘氏を  
賜へる時、御製の歌一首

冬十一月左大辨葛城王等賜姓橘氏之時  
御製歌一首

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れ  
どいや常葉の樹 (卷第六)

橘者 實左倍花左倍 其葉左倍 枝爾霜  
雖降 益常葉之樹

・太上(元)、「太上」

右、冬十一月九日、從三位葛城王從四位  
上佐爲王等、皇族の高名を辭して外家の  
橘姓を賜ふこと已に訖りぬ。時に太上天

右冬十一月九日。從三位葛城王從四位上  
佐爲王等。辭皇族之高名賜外家之橘姓已  
訖。於時太上天皇皇后共在于皇后宮。以

・焉(元)、「爲」

皇、皇后、共に皇后宮にいます。以て肆  
宴を爲し、即ち橘を賀ぐ歌を作り給ひ、  
并に御酒を宿禰等に賜ひき。或は云ふ。こ  
の歌一首は太上天皇の御歌なり。但し天  
皇皇后の御歌各一首ありといへり。その  
歌遺落して未だ探り求むることを得ず。

爲肆宴而即御製賀橘之歌并賜御酒宿禰等  
也。或云。此歌一首太上天皇御歌。但天  
皇皇后御歌各一首者。其歌遺落未得探  
求焉。今檢案内。八年十一月九日。葛城  
王等願橘宿禰之姓上表。以十七日依表乞  
賜橘宿禰。

一 おほみうた

今案内を検するに、八年十一月九日、葛城王等、橘宿禰の姓を願ひて表を上る。十七日を以て、表の乞に依りて、橘宿禰を賜ふ。

孝謙天皇

從四位上高麗朝臣福信に勅して、難波に遣し、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に賜へる御歌一首并に短歌

勅從四位上高麗朝臣福信遣於難波賜酒肴入唐使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌

○元曆校本及び金澤文庫本は宣命書にせり。

そらみつ 大和の國は 水の上は 地往  
く如く 船の上は 床に坐る如 大神の  
鎮へる國ぞ 四の舶 舶の舳竝べ 平ら  
けく 早渡り來て 返言 奏さむ日に  
相飲まむ酒ぞ 斯の豐御酒は

虛見都 山跡乃國波 水上波 地往如久  
船上波 床座如 大神乃 鎮在國會 四  
舶 舶能倍奈 平安 早渡來而 還事 奏  
日爾 相飲酒會 斯豐御酒者  
反歌一首

反歌一首

四舶 早還來等 白香著 朕裳裾爾 鎮

四の舶はや還り來と白香著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ (卷第十九)

右は勅使を發遣し、并に酒を賜へる樂宴の日月、いまだ詳審なることを得ざるなり。

而將待

右發遣勅使并賜酒樂宴之日月未得詳審也。

○皇室に關し奉る歌

○天皇一持統天皇と拜せらる。

二神にしませば 附おほみやどころ

天皇の雷岳にいでましし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麻呂作歌一首

皇は神にしませば天雲の雷の上に廬せ

皇者 神二四座者 天雲之 雷之上爾 廬爲流鴨

右は、或本に云ふ、忍壁皇子に獻れるなり。その歌に曰く、王は神にしませば雲隠る雷山に宮敷きいます

右或本云。獻忍壁皇子也。其歌曰。王神座者雲隠伊加土山爾宮敷座

ふみあだし布美安太之(元)、「布美安多之」

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天皇歌一首

天雲をほろにふみあだし鳴る神も今日に益りてかしこけめやも (卷第十九) 右一首傳誦縁久米朝臣廣羅也

吉野宮に幸しし時、柿本朝臣人麿の作

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌

れる歌 やすみしし 吾大王 神ながら 神さび

安見知之 吾大王 神長柄 神佐備世須

せすと 芳野川 たざつ河内に 高殿を

登 芳野川 多藝津河内爾 高殿乎 高知座而 上立 國見乎爲波 疊有 青垣

高しりまして 登り立ち 國見をせば

山 山神乃 奉御調等 春部者 花挿頭 持 秋立者 黄葉頭刺理 一云黄葉 近副

疊はる 青垣山 山神の奉る御調と

川之神母 大御食爾 仕奉等 上瀬爾 鶴川乎立 下瀬爾 小網刺渡 山川母 依氏奉流 神乃御代鴨

春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉

を立て 下つ瀬に 小網さし渡す 山川

かざせり 黄葉かざし 逝き副ふ 川の神も

も 依りて奉れる 神の御代かも

大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鶴川

反歌 山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内 爾 船出爲加母

反歌

右、日本紀に曰く、三年己丑正月、天

右日本紀曰。三年己丑正月天皇幸吉野宮。八月幸吉野宮。四年庚寅二月幸吉野宮。

皇吉野宮に幸す。八月、吉野宮に幸す。  
 四年庚寅二月、吉野宮に幸す。五月、吉野宮に幸す。五年辛卯正月、吉野宮に幸す。四月、吉野宮に幸す。といへれば、未だ詳に知らず。何れの月駕に従ひて作れる歌なるかを。

五月幸吉野宮。五年辛卯正月幸吉野宮。四月幸吉野宮者。未詳知何月從駕作歌。

角麻呂歌四首 (三首略)

清江の野木の松原遠つ神我王の幸行處 (卷第三)

清江乃野木笑松原(神)清江乃木笑松原

天皇、聖躬不豫の時、太后の奉れる御歌一首

○天皇—天智天皇  
○太后—倭姫太后

天の原ふりさけ見れば大王の御壽は長く  
 天足らしたり (卷第二)

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首  
 天原 振放見者 大王乃 御壽者長久  
 天足有

天平寶字元年十一月十八日於西裏一聯宴歌二首 (一首略)

天地をてらす日月の極はなくあるべきものをなにかおもはむ (卷第二十)  
 右一首皇太子御歌

・なにをか—奈爾乎加(元)奈爾加  
○皇太子—大炊王

日並皇子尊殞宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌

・柿本朝臣(金)、「柿本」  
大率ノミマタヲヲ御案ニシテ  
あまの宮オホカニ侍ル

・初時(金)、「初時之」

・天乎婆(金)、「天乎波」

天地の初の時 ひさかたの 天の河原  
 に 八百萬 千萬神の 神集ひ 集ひ坐  
 して 神あかち あかちし時に 天照ら  
 す 日靈尊のほる日靈尊 天をば 知らし  
 めすと 葦原の 瑞穂の國を 天地の 依  
 り合ひの極 知らしめす 神の尊と 天  
 雲の 八重かき別けて一に云ふ、天雲 神下  
 り 坐せまつりし 高照らす 日の皇子  
 は 飛ぶ鳥の 淨の宮に 神ながら 太  
 敷きまして 天皇の 敷きます國と 天

天地之 初時 久堅之 天河原爾 八百  
 萬 千萬神之 神集 集座而 神分 分  
 之時爾 天照 日女之命 一云指上 天乎婆  
 所知食登 葦原乃 水穂之國乎 天地之  
 依相之極 所知行 神之命等 天雲之  
 八重搔別而 一云天雲之 神下 座奉之 高  
 照 日之皇子波 飛鳥之 淨之宮爾 神  
 隨 太布座而 天皇之 敷座國等 天原  
 石門乎開 神上 上座奴爾 一云神登座 吾王  
 皇子之命乃 天下 所知食世者 春花之

二神にしませば

阿(金)「尚」

の原 岩戸を開き 神上り 上り坐しぬ

貴在等 望月乃 満波之計武跡 天下一云食國

知らしめしせば 春花の 貴からむと

四方之人乃 大船之 思憑而 天水 仰

望月の 満はしけむと 天の下一一云云ふ

而待爾 何方爾 御念食可 由縁母無

四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天つ

眞弓乃岡爾 宮柱 太布座 御在香乎

水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほし

高知座而 明言爾 御言不御間 日月之

めせか 由縁もなき 眞弓の岡に 宮柱

數多成塗 其故 皇子之宮人 行方不知

太敷きまし 高知りまして

毛一云刺竹之皇子宮人歸邊不知爾爲

明言に 御言問はさす 日月の 數多く

反歌 久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門

なりぬれ そこ故に 皇子の宮人 行方

之 荒卷惜毛

知らずも 一に云ふ、さす竹の皇子の宮人ゆくへ知らにす

茜刺 日者雖照有 烏玉之 夜渡月之

反歌二首

隱良久惜毛或本以件歌爲後皇子尊殞宮之時歌反也

ひさかたの天見ることく仰ぎ見し皇子の

或本歌一首 島宮 勾乃池之 放鳥 人目爾戀而 池

御門の荒れまじ惜しも

爾不潜

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜

或本(金)「或本  
尊(金)「貴」  
云」

○後の皇子の尊一  
高市皇子尊

渡る月の隠らく惜しも 或本、件の歌を以て後  
の歌の反

或本の歌一首

島の宮勾の池の放ち鳥人目に戀ひて池に  
潜かず (卷第二)

○皇子尊一日竝皇  
子尊

皇子尊宮舍人等働傷作歌二十三首

はも一波母(金)「  
婆母」

高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも  
島の宮上の池なる放ち鳥荒ひな行きを君座さすとも

荒れざらましを  
一不荒有益乎

高光る吾が日の皇子の座しせば島の御門は荒れざらましを

(金)「不荒有益  
乎」

外に見し檀の岡も君座せば常つ御門と侍宿するかも

佐日(金)「作日」

夢にだに見ざりしものを體慥しく宮出もするか佐日の隈回を

天地と共に終へむと念ひつつ仕へまつりし情違ひぬ

朝日てる佐太の岡邊に群れ居つつ吾が哭く涙やむ時もなし

御立せし島を見る時にはたづみ流るる涙止めぞかねつる

橋の島の宮にはあかねかも佐多の岡邊に侍宿しに往く

檀の島

鳥垣(類)「鳥垣」

日五

御立せし鳥をも家と住む鳥も荒びな行きを年替はるまで

御立せし鳥の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

鳥垣立て飼ひし鷹の兒栖立ちなば檀の岡に飛び反り來ね

吾御門千代常とはに榮えむと念ひてありし吾し悲しも

東のたぎの御門に伺へど昨日も今日も召すこともなし

水傳ふ磯の浦回石つつじもくさく道をまた見なむかも

一日には千過参入りし東の大き御門を入りがてぬかも

所由もなき佐太の岡邊に反りぬば島の御はしに誰か住まはむ

日覆日の入りぬれば御立せし島に下りぬて嘆きつるかも

あさ日照る島の御門に鬱悒しく人音もせねばまうら悲しも

眞木柱太き心は有りしかど此の吾が心鎮めかねつも

けごろもを春冬片設けて幸しし宇陀の大野は念ほえむかも

朝日照る佐太の岡邊に鳴く鳥の夜鳴變らふ此の年ごろを

やたこらが夜晝と云はず行く路を吾は悉皆宮道にぞする

右日本紀曰。三年己丑夏四月癸未朔乙未薨。

且覆金「且覆」  
あさ日「且日」  
(金)「且日」

やたこらが一八  
多籠良(六金)  
「八多籠良家」

○輕皇子文武天皇

輕皇子の安騎野に宿りませる時、柿本

朝臣人麿の作れる歌

やすみしし 吾大王 高照らす 日の皇

子 神ながら 神さびせすと 太敷かす

京を置きて 隱口の 泊瀬の山は 眞木

立つ 荒山道を 石が根の 禁樹おしな

べ 坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる

夕さりくれば み雪降る 阿騎の大野に

旗薄 しのを おし靡べ 草枕 旅宿りせ

す 古思ひて

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 神

長柄 神佐備世須登 太敷爲 京乎置而

隱口乃 泊瀬山者 眞木立 荒山道平

石根 禁樹押靡 坂鳥乃 朝越座而 玉

限 夕去來者 三雪落 阿騎乃大野爾

旗須爲寸 四能乎押靡 草枕 多日夜取

世須 古昔念而

短歌

阿騎乃野爾 宿旅人 打靡 寐毛宿良目

八方 古部念爾

眞草薺 荒野者雖有 黄葉 過去君之

形見跡曾來師

京 野炎 立所見而 反見爲者 月西渡

阿騎乃野爾(神)  
「阿騎乃爾」  
宿良目(八方類)  
「宿良自八方」  
黄葉(代匠記の  
説)「葉」

君が形見とぞ來し

神にしませば  
此かたし  
たす  
たす

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみ  
すれば月西渡きぬ

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御獵立師斯  
時者來向

日竝の皇子の尊の馬竝めて御獵立たしし  
時は來向ふ (卷第一)

○長皇子一 天武天皇の第四皇子

長皇子、獵路池に遊び給へる時、柿本

長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌

一首并短歌

朝臣人麿の作れる歌一首并短歌  
やすみしし 吾大王 高光る わが日の  
皇子の 馬竝めて み獵立たせる 弱薦  
を 獵路の水野に 猪鹿こそは い旬ひ  
拜がめ 鶺鴒こそ い旬ひもとほれ 猪鹿  
じもの い旬ひ拜がみ 鶺鴒す い旬ひ  
もとほり かしこみと 仕へ奉りて ひ  
さかたの 天見ることく まる鏡 仰ぎ  
て見れど 春草の いやめづらしき 吾

八隅知之 吾大王 高光 吾日乃皇子乃  
馬並而 三獵立流 弱薦乎 獵路乃小野  
爾 十六社者 伊波比拜目 鶺鴒已曾 伊  
波比回禮 四時自物 伊波比拜 鶺鴒成  
伊波比毛等保理 恐等 仕奉而 久堅乃  
天見如久 真十鏡 仰而雖見 春草之  
益目頰四寸 吾於富吉美可聞  
反歌一首

大王かも

反歌一首

ひさかたの天行く月を網に刺し我大王は  
蓋にせり

或本の反歌一首  
皇は神にしませば真木の立つ荒山中に海  
をなすかも (卷第三)

久堅乃 天歸月乎 網爾刺 我大王者

蓋爾爲有

或本反歌一首

皇者 神爾之坐者 真木之立 荒山中爾  
海成可聞

○都を讃へ奉る歌。

おほみやどころ

近江の荒都を過る時、柿本朝臣人麿の  
作れる歌

玉櫛 畝傍の山の 櫃原の 日知之御代  
生れましし 神のことごと  
天の下 知  
大和を

過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌

玉手次 畝火之山乃 櫃原乃 日知之御  
世從 阿禮座師 神之盡 穆木乃 爾  
繼嗣爾 天下 所知食之乎 天爾滿  
倭乎置而 青丹吉 平山乎越

・神之盡(元)「神  
之書」

三 神にしませば

置きて あをによし 奈良山を越え 云ふ

そらみつ大和を置きあ いかさまに おもほ

しめせか 或は云ふ 天離る 裏にはあれ

ど 石走る 淡海の國の ささなみの 河

大津の宮に 天の下 知らしめしけむ

天皇の 神の尊の 大宮は 此處と聞け

ども 大殿は 此處と言へども 春草の 見エス

茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる 或

見れば悲しも 或は云ふ 見ればさぶしも

反歌

ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ

ささなみの志賀の 比良の 大曲淀むとも

昔の人に亦も逢はめやも 一に云ふ はむともへや

こし心山脈

何方 御念食可 或去所念 天離 夷者雖有

石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮爾 天

下 所知食兼 天皇之 神之御言能 大

宮者 此間等雖聞 大殿者 此間等雖云

春草之 茂生有 霞立 春日之霧流 或云霞立

春草之 茂生有 霞立 春日之霧流 或云霞立

毛 或云見者 左夫思母

反歌

樂浪之 思賀乃辛崎 雖幸有 大宮人之

船麻知兼津

左散難彌乃 志我能 一云比良乃 大和太 與杼

六友 昔人二 亦母相目八毛 一云將會跡母戸八

(卷第一)

あさなみ

柿本朝臣人麻呂歌一首 作 淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば情もしのに古念ほゆ (卷第三)

藤原宮の御井の歌

やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子

始め給ひて 壇安の 堤の上に 在り立

たし 見し給へば 大和の 青香具山は

日の經の 大御門に 春山と 繁さび立

てり 畝傍の この瑞山は 日の緯の

大御門に 瑞山と 山さびいます 耳成

の 背山は 背面の 大御門に 宜し

なべ 神さび立てり 名ぐはし 吉野の

山は 影面の 大御門ゆ 雲居にぞ 遠

藤原宮御井歌

八隅知之 和期大王 高照 日之皇子

龜妙乃 藤井我原爾 大御門 始賜而

壇安乃 堤上爾 在立之 見之賜者 日

本乃 青香具山者 日經乃 大御門爾

春山跡 之美佐備立有 畝火乃 此美豆

山者 日緯能 大御門爾 彌豆山跡 山

佐備伊座 耳爲之 青背山者 背友乃

大御門爾 宜名倍 神佐備立有 名細

吉野乃山者 影友乃 大御門從 雲居爾

曾 遠久有家留 高知也 天之御蔭 天

耳爲之、萬葉考の説し「耳高之」

春山跡(或は)春山路

北

大和山ニ國都

藤原宮

二 神しませば

くありける 高知るや 天の御蔭 天知 知也 日御影乃 水許曾波 常爾有米  
 るや 日の御影の 水こそは 常にあら 御井之清水  
 め 御井の清水

短歌

・乏吉呂賀聞(玉  
 小琴の説)  
 「之吉呂賀聞」

藤原の大宮づかへあれつくや處女がとも  
 は羨しきろかも (卷第二)

藤原之 大宮都加倍 安禮衝哉 處女之

友者 乏吉呂賀聞

右の歌、作者いまだ詳ならず。

藤原宮之役民作歌

やすみしし 吾大王 高照らす 日の皇子 あらたへの 藤原がうへに 食國を めし賜はむと  
 都宮は 高知らさむと 神ながら 念ほすなべに 天地も よりてあれこそ 磐走る 淡海の國  
 の 衣手の 田上山の 眞木さく 檜の櫛手を ものの 八十氏河に 玉藻なす 浮べ流せ  
 れ 其を取ると さわく御民も 家忘れ 身もたな知らに 鴨じもの 水に浮きわた 吾が作る  
 日の御門に 知らぬ國 依り巨勢道ゆ 我が國は 常世に成らむ 圖負へる 神 龜も 新代と  
 泉の河に 持ち越せる 眞木の櫛手を 百足らす いかだに作り 浜すらむ いそはく見れば  
 神ながらならし (卷第一)

右日本紀曰。朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地。八年甲午春正月幸藤原宮。冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮。

原宮。

山部宿禰赤人の作れる歌二首(一首略并に短歌)

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

芳野宮(元)「芳野宮やすみしし わご大王の 高知らす 芳野宮  
 野の宮は たたなづく 青牆隱り 河次乃 清河内會  
 の 清き河内ぞ 春は 花咲き撓り 春部者 花咲乎遠里 秋去者 霧立渡  
 秋されば 霧立ち渡る その山の いや 其山之 彌益々爾 此河之 絶事無 百  
 益益に この河の 絶ゆること無く 石木能 大宮人者 常將通

反歌二首

もしきの 大宮人は 常に通はむ  
 三吉野乃 象山際乃 木末爾波 幾許毛  
 反歌二首 散和口 鳥之聲可聞  
 鳥の聲かも 夜乃深去者 久木生留 清河原  
 ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清 爾 知鳥數鳴

神にしませば



立ち合ふ郷と一  
立合郷跡(神)  
岡邊(元)「岡邊(神)」  
大宮(元)「大宮」  
山並の宜しき國と 川次の 立ち合ふ郷と 山代の 鹿背山の際に 宮柱 太敷き奉り 高知  
らす 布當の宮は 河近み 湍の音ぞ清き 山近み 鳥がねとよむ 秋されば 山もとどろに  
を鹿は 妻呼びとよめ 春されば 岡邊も 巖には 花開きををり あな何恰 布當の原  
あな貴 大宮處 諾しこそ 吾大王は 君ながら 聞かし賜ひて さす竹の 大宮此處と 定め  
けらしも 三 派

反歌二首

三日の原布當の野邊を清みこそ大宮處一に云ふこと定めけらしも  
山高く川の湍清し百世まで神しみ往かむ大宮所 (卷第六)

一に云ふこと  
としめきし十一  
云此跡標刺(元)  
寛永版本なし  
山高く一山高來  
(萬葉考の説)  
「号高來」

三 みたみわれ

○臣民の道に關する歌。

○六年一天平六年

六年甲戌、海犬養宿禰岡麿の、詔に應

ふる歌一首

六年甲戌海犬養宿禰岡麿應詔歌一首

御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇

御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相

へらく念へば (卷第六)

樂念者

爲レ應レ詔儲作歌一首并短歌

あしひきの 八峯のうへの つがの木の いや繼ぎ繼ぎに 松が根の 絶ゆる事なく あをによ  
し 奈良の京師に 萬代に 國しらさむと やすみしし 吾大皇の 神ながら おもほしめして  
豐 宴 見す今日は ものふの 八十伴雄の 島山に あかる橘 うすにさし 紐解き放けて  
千年ほぎ ほぎとよもし ゑらゑらに 仕へ奉るを 見るが貴さ

反歌一首

すめろぎの御代萬代にかくしこそ見しあきらめ立つ年のはに (卷第十九)

三 みたみわれ

・ほぎとよもし  
保吉等餘毛之  
(元)「保俊吉等  
餘毛之」

右二首大伴宿禰家持作之。

大宰少貳石川朝臣足人歌一首

さすたけの大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君

帥大伴卿和歌一首

やすみしし吾大王のをす國はやまともこも同じとぞ念ふ

大伴宿禰家持

○十一月八日一天平勝寶四年

十一月八日在於左大臣橋朝臣宅肆宴歌四首(三首略)

天地に足らはし照りて吾大皇しきませばかも樂しき小里(第卷十九)

右一首少納言大伴宿禰家持 未し奏。

○十八年一天平十八年

十八年正月、白雪多く降りて、地に積むこと數寸なり。時に、左大臣橋卿は大納言藤原豐成朝臣及び諸王臣等を率て太上天皇の御在所中西宮に參入りて、供奉して雪を掃ふ。ここに詔を降し

十八年正月。白雪多零積地數寸也。於時左大臣橋卿率大納言藤原豐成朝臣及諸王臣等。參入太上天皇御在所中西宮供奉掃雪。於是降詔。大臣參議并諸王者令侍于大殿上。諸臣大夫者令侍于南

- 十八年(元)「天
- 平十八年」
- 「諸王臣等」(元)
- 「諸王諸臣等」
- 西院(元)「兩院」
- 諸卿大夫(元)
- 「諸卿大夫等」
- 賜酒(元)「賜海」

て、大臣參議并に諸王は大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は南の細殿に侍はしめて、則ち酒を賜ひて肆宴じよあひちしたまふ。勅して曰く、汝諸王卿等、聊か此の雪を賦して各其の歌を奏せよと。

細殿。而則賜酒肆宴。勅曰。汝諸王卿等聊賦此雪各奏其歌。

左大臣橋宿禰、詔に應ふる歌一首  
降る雪の白髪までに大皇に仕へまつれば  
貴くもあるか  
紀朝臣清人、詔に應ふる歌一首  
天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば  
貴くもあるか

左大臣橋宿禰應 詔歌一首  
布流由吉乃 之路髮麻泥爾 大皇爾 都可倍麻都禮婆 貴久母安流香  
紀朝臣清人應 詔歌一首  
天下 須泥爾於保比底 布流雪乃 比加里乎見禮婆 多敷刀久母安流香  
葛井連諸會應 詔歌一首  
新年乃婆自米爾 豐乃登之 思流須登 奈良思 雪能敷禮流婆

葛井連諸會、詔に應ふる歌一首

新 年乃婆自米爾 豐乃登之 思流須登 奈良思 雪能敷禮流婆

新しき年のはじめに豊の年しるすとなら  
し雪のふれるは (卷第十七)

○二十五日天平  
勝實四年十一月

二十五日新嘗會肆宴應詔歌六首 (五首略)  
天地とあひさかえむと大宮をつかへまつれば貴くうれしき (卷第十九)

右一首大納言巨勢朝臣

○上野國(神)「上野國司」

田口益入大夫の上野國に任せられし時、

田口益入大夫任上野國時至駿河淨見崎

略 駿河淨見崎に至りて作れる歌二首(一首 作歌二首)

畫見れど飽かぬ田兒の浦大王の命かしこ 畫見騰 不飽田兒浦 大王之 命恐 夜  
み夜見つるかも (卷第三) 見鶴鵬

○天平八年、遣新羅使の歌。  
道恒(西)「道恒」

佐婆海中忽遭逆風漲浪漂流。經宿而後幸得順風。到著豐前國下毛郡分間浦。於是追

但艱難懷惆作歌八首 (七首略)  
於保伎美能 美許等可之故美 於保夫禰能 由伎能麻爾末爾 夜杵里須流可母 (卷第十五)

右一首雪宅磨

○八日天平勝實  
八年十一月  
田雲元「田雲」

八日讚岐守安宿王等集於田雲掾安宿奈杵磨(卷第二十)一首  
於保吉美乃 美許等加之古美 於保乃宇良乎 曾我比爾美都々 美也古敬能保流 (卷第二十)

安宿元「古宿」

右掾安宿奈杵磨。主人安宿奈杵磨語云。奈杵磨被差朝集使擬入京師。因此饑之日各作此歌聊陳所心也。

天皇壬天武天皇

神龜六年己巳左大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作歌一首

大皇(類)「太皇」

大皇の命恐みおぼあらしの時にはあらねど雲隠ります (卷第三)

新成道(卷第三)

神皇正統記(卷第三)

手抄(卷第三)

鹿(昔)「鹿」

乞食者詠二首 (二首略)  
なせの君 居り居りて ものにい行くとは 韓國の 虎とふ神を 生け取りに 八頭取  
り持ち來 其の皮を たたみに刺し 八重疊 平群の山に 四月と 五月の間に 藥獵 仕ふる  
時に あしひきの 此の片山に 二つ立つ いちひが本に 梓弓 八つたばさみ ひめかぶら  
八つたばさみ しし待つと 吾が居る時に さを鹿の 來立ち嘆かく 頰に 吾は死ぬべし  
王に 吾は仕へむ 吾が角は 御笠のはやし 吾が耳は 御墨の埜 吾が目らは ますみの鏡  
吾が爪は 御弓のゆはず 吾が毛らは 御筆のはやし 吾が皮は 御箱の皮に 吾が突は みなまなす  
すはやし 吾がきもも みなますはやし 吾がみけは 御鹽のはやし 着いたる奴 吾が身一つ  
に 七重花さく 八重花さくと 白しはやさね 白しはやさね (卷第十六)

「完」以下同じ。  
來立ち嘆かく  
來立來嘆久  
來立來嘆久」

右歌一首爲鹿逃し痛作之也。

みたまわれ

はな(林料) 二九  
ハエマシ(林料)  
ガク(林料) 二九  
之層布(林料)

二行夜使

東山陰西海節度使  
上陸多治比呂守  
軍備等見也

〇四年—天平四年

四年壬申、藤原宇合卿の西海道節度使

に遣されし時、高橋連蟲麿の作れる歌

一首并に短歌

白雲の 龍田の山の 露霜に 色づく時

に うち越えて 旅行く君は 五百重山

に行きさくみ 賊守る 筑紫に至り 山

の極 野の極見よと 伴の部を 分ち遣

し 山彦の 應へむ極 谷墓の さ渡る

極 國狀を 見し給ひて 冬ごもり 春

ざり行かば 飛ぶ鳥のはやく來まさね

龍田道の 丘邊の路に 丹躰の 薫は

む時の 櫻花 咲きなむ時に 山たづの

迎へ參出む 君が來まさば

反歌一首

千萬(元)「千萬」

四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之

時。高橋連蟲麿作歌一首并短歌

白雲乃 龍田山乃 露霜爾 色附時丹

打超而 客行公者 五百隔山 伊去割見

賊守 筑紫爾至 山乃曾伎 野之衣寸見

世常 伴部乎 班遣之 山彦乃 將應極

谷潜乃 狹渡極 國方乎 見之賜而 冬

木成 春去行者 飛鳥乃 早御來 龍田

道之 岳邊乃路爾 丹管士乃 將薰時能

櫻花 將開時爾 山多頭能 迎參出六

公之來益者

反歌一首

千萬乃 軍奈利友 言舉不爲 取而可來

千萬の軍なりとも言舉せず取りて來ぬべ

き男とぞ思ふ (卷第六)

右、補任の文を檢するに、八月十七日、

東山山陰西海節度使に任ず。

男常會念

右檢補任文八月十七日任東山山陰西海節

度使。

○五倫に關する歌。

四 きよきその名 (人倫關係の歌)

みかどのまもり

山上臣憶良、病に沈みし時の歌一首

士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき

名は立てずして (卷第六)

右の二首は、山上憶良臣の病に沈みし時、

藤原朝臣八束、河邊朝臣東人をして疾め

る状を問はしむ。ここに憶良臣、報の語

已に畢り、須ありて涕を拭ひ、悲しみ

嘆きて、この歌を口吟みき。

山上臣憶良沈病之時歌一首

士也母 空應有 萬代爾 語續可 名者

不立之而

右一首山上憶良臣沈病之時。藤原朝臣八

束。使河邊朝臣東人令問所疾之狀。於是

憶良臣報語已畢。有須拭涕悲嘆。口吟此

歌。

山上臣憶良、病に沈みし時の歌一首  
士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき  
名は立てずして (卷第六)

・ちちの實一知智  
乃實(元)「知智  
之實」

慕振勇士之名一歌一首并短歌

ちちの實の 父のみこと ははそ葉の 母のみこと おほろかに 情盡して 念ふらむ その子

なれやも 大夫や 何用と云ふべき 梓弓・すゑふりおこし 投矢もち 千尋射わたし 劍刀  
こしにとりはき あしひきの 八峯ふみ越え さしまくる 情障らず 後の代の かたりつぐべ  
く 名をたつべしも 杖田 義朝 五重入道 藤原朝臣

・元曆本により  
「反歌」の二字を  
除く。

大夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人もかたりつぐがね (卷第十九)  
右二首追記和山上憶良臣作歌

笠朝臣金村藤津山作歌二首 (一首略)

大夫の弓上振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね (卷第三)

賀陸奥國出金 詔書歌一首并短歌

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良  
志賣之家流 須賣呂伎能 神乃美許等能  
御代可佐爾 天乃日嗣等 之良志久流  
伎美能御代御代 之伎麻世流 四方國爾  
波 山河乎 比呂美安都美等 多豆麻都  
流 御調寶波 可蘇倍衣受 都久之毛可

書の歌一首并短歌

葦原の 瑞穂の國を 天降り しらしめ  
しける 天皇の 神の命の 御代重ね  
天の日嗣と しらし來る 君の御代御代  
敷きませる 四方の國には 山河を 廣  
みあつみと たてまつる 御調寶は 敷

四 きよきその名

・多豆麻都流元、  
「多豆麻豆流」

宣命ノ時  
天乎 勝宝之年  
(元平 三十一)

・多之氣久(元)、「多能之氣久」

へ得ず 盡しもかねつ 然れども 吾大  
王の 諸人を 誘ひ給ひ、善き事を 始  
め給ひて 金かも たしけくあらむと  
思ほして 下惱ますに 鶏が鳴く 東の  
國の 陸奥の 小田なる山に 金ありと  
奏し給へれ 御心を 明らめ給ひ 天地  
の 神相うづなひ 皇御祖の 御靈助け  
て 遠き代に かかりし事を 朕が御世  
に 顯してあれば 食國は 榮えむもの  
と 神ながら 思ほしめして ものふ  
の 八十伴の雄を まづろへの  
まにまに 老人も 女童兒も 其が願ふ  
心足ひに 撫で給ひ 治め給へば 此を  
しも あやに貴み 嬉しけく 愈思ひて  
大伴の 遠つ神祖の 其の名をば 大來

禰都 之加禮騰母 吾大王能 毛呂比登  
乎 伊射奈比多麻比 善事乎 波自米多  
麻比且 久我禰可毛 多之氣久安良牟登  
於母保之且 之多奈夜麻須爾 鶏鳴 東  
國能 美知能久能 小田在山爾 金有等  
麻宇之多麻敵禮 御心乎 安吉良米多麻  
比 天地乃 神安比宇豆奈比 皇御祖乃  
御靈多須氣且 遠代爾 可可里之許登乎  
朕御世爾 安良波之且安禮婆 御食國波  
左可延牟物能等 可牟奈我良 於毛保之  
賣之且 毛能乃布能 八十伴雄乎 麻都  
呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人毛 女童  
兒毛 之我願 心太良比爾 撫賜 治賜  
許己乎之母 安夜爾多敷刀美 宇禮  
之家久 伊余與於母比且 大伴能 遠都

前

聖成天皇

三四

・可敵里見(元)、「可弊里見」  
・太且(西)、「大」

・都可左(元)、「都  
可佐」

・麻毛里余(元)、「麻毛里」

目主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行か  
ば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大  
皇の 邊にこそ死なめ 顧みは せじと  
言立て 丈夫の 清き彼の名を 古よ  
今の現に 流さへる 祖の子どもぞ 大  
伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言  
立 人の子は 祖の名絶たず 大君に  
まつるふものと 言ひ繼げる ことのつ  
かさぞ 梓弓 手に取りもちて 劔大刀  
腰にとり佩き 朝守り 夕の守りに 大  
王の 御門の守護よ 我をおきて また  
人はあらじと 彌立て 思ひし増る 大  
皇の 御言の幸の一に云 聞けば貴み一に  
云ふ、貴くしあれば 大伴まゝに  
反歌三首 下ラッラ

神祖乃 其名乎婆 大來目主登 於比母  
知且 都加倍之官 海行者 美都久屍  
山行者 草牟須屍 大皇乃 敵爾許曾死  
米 可敵里見波 勢自等許等太且 大夫  
乃 伎欲吉彼名乎 伊爾之敵欲 伊麻乃  
乎追通爾 奈我佐敵流 於夜能子等毛會  
大伴等 佐伯氏者 人祖乃 立流辭立  
人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物  
能等 伊比都雅流 許等能都可左會 梓  
弓 手爾等里母知且 劔大刀 許之爾等  
里波伎 安佐麻毛利 由布能麻毛利爾  
大王能 三門乃麻毛利余 和禮乎於吉且  
且比等波安良自等 伊夜多且 於毛比之  
麻左流 大皇乃 御言能左吉乃一云 聞  
者貴美一云貴久之安禮婆

四 きよきその名

三五

丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸をふに云の

聞けば貴み一に云ふ、貴くしあれば

大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立て人の知るべく

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に

・多豆元「多底」

金花咲く (卷第十八)

天平感寶元年五月十二日、越中國守の館にて大伴宿禰家持作れり。

反歌三首

大夫能 許己呂於毛保由 於保伎美能

美許登能佐吉乎能 聞者多布刀美云貴久之安禮婆

大伴能 等保追可牟於夜能 於久都奇波

之流久之米多豆 比等能之流倍久

須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈

流 美知能久夜麻爾 金花佐久

天平感寶元年五月十二日於越中國守館大伴宿禰家持作之。

嘯旗歌一首并短歌

天原序

ひさかたの あまのとひらき たかちほの たげにあもりし すめろぎのかみの御代よりは  
じゆみを たにぎりもたし まかこやを たばさみそへて おほ久米のますらたけをを さき  
にたて ゆぎとりおほせ 山河を いはねさくみて ふみとほり くらまきしつち ちはやぶる  
神をことむけ まつろはぬ ひとをもやはし はききよめ つかへまつりて あきつしま やま  
とのくにの かしはらの うねびの宮に みやばしら ふとしりたてて あめのした しめしめ

・たばさみ「多婆左美(元)」「多波左美」  
・かしはら「加之波良(元)」「可之婆良」

しける すめろぎの あまの日繼と つぎてくる きみの御代御代 かくさはぬ あかきこころ

を すめらべに きはめつくして つかへくる おやのつかさと ことだてて さづけたまへる

うみのこの いやつぎつぎに みるひとの かたりつぎてて きくひとの かがみにせむを

たらしき きよきその名ぞ おほろかに こころおもひて むなごとも おやの名たつな 大伴

の うちと名におへる ますらをのとも

しきしまのやまとのくににあきらけき名におふとものをこころつとめ

つるぎたちいよとぐべしいにしへゆさやけくおひてきにしその名ぞ (卷第二十一)

右綴淡海真人三船謠言出雲守大伴古蓋悲宿禰解任。是以家持作此歌也

惑へる情を反さしむる歌一首并序

或は人あり。父母を敬ふことを知れども侍養を忘れ、妻子を顧みずして脱屣

・脱屣(西)「脱履」  
・倍俗(神)「畏俗」

よりも軽みせり。みづから倍俗先生と稱る。意氣は青雲の上に揚るといへども、身體は猶塵俗の中に在り。いまだ

四きよきその名

令反感情歌一首并序

或有人。知敬父母忘於侍養。不顧妻子

輕於脱屣。自稱倍俗先生。意氣雖揚青

雲之上。身體猶在塵俗之中。未驗修行

得道之聖。蓋是亡命山澤之民。所以指

示三綱。更開五教。遺之以歌令反其惑。



反歌

ハロ銀も金も玉も何せむにまされる寶子に如  
かめやも (卷第五)

銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻佐禮留  
多可良 古爾斯迦米夜母

反歌

・憶良臣(古)「臣  
憶良」

山上憶良臣の宴を罷る歌一首

山上憶良臣罷宴歌一首

ヨミ 憶良は今は罷らむ子哭くらむそれ彼の  
母も吾を待つらむぞ (卷第三)

憶良等者 今者將罷 子將哭 其彼母毛  
吾平將待曾

天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時、親母贈子歌一首并短歌

秋芽子を 妻問ふ鹿こそ 一子に 子持たりといへ 鹿兒じもの 吾が獨子の 草枕 客にし往  
竹珠を 密に貫き垂り 寮戸に 木綿取りしでて いはひつつ 吾が思ふ吾子 眞さきく  
ありこそ ありこそ ありこそ

一七九 客人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽くくめ天の鶴群 (卷第九)

無子かアアア  
クシヨ

・巖成西「巖成」  
・常磐元「常盤」

市原王の宴に父安貴王を禱ぐ歌一首  
春草は後は散り易し巖なす常磐に坐せ貴  
吾が君 (卷第六)

市原王宴禱父安貴王歌一首  
春草者 後波落易 巖成 常磐爾座 貴  
吾君

能登國歌三首 (二首略)

三ハハ かしまねの 机の島の 小螺を い拾ひ持ち來て 石もち つつき破り 早川に 洗ひ濯ぎ 辛  
鹽に ここともみ 高杯に盛り 机に立てて 母に奉りつや めづ兒のとじ 父に頼りつや み  
め兒のとじ (卷第十六)

カハイ、カ  
カハイ、カ

・つつき破り  
「都遣伎破夫利」  
又「つつきはぶ  
り」ともよみ得。  
とじ「負」を尼  
崎本により「刀  
自」と意改す。

枕詞

わがせ・わぎもこ

三二四 つぎねふ 山城道を 他夫の 馬より行

くに 己夫し 歩より行けば 見る毎に  
哭のみし泣かゆ そこ思ふに 心し痛し  
たらちねの 母が形見と 吾が持たる  
まごみ鏡に 蜻蛉領布 負ひ竝め持ちて

次嶺經 山背道乎 人都末乃 馬從行爾  
己夫之 步從行者 每見 哭耳之所泣  
曾許思爾 心之痛之 垂乳根乃 母之形  
見跡 吾持有 眞十見鏡爾 蜻領巾 負  
並持而 馬替吾背

四 きよきその名

馬かへ吾が背

反歌

泉河 渡瀬深見 吾世古我 旅行衣 蒙

沾鴨

或本反歌曰

清鏡 雖持吾者 記無 君之步行 名積

去見者

馬替者 妹步行將有 縦惠八子 石者雖

履 吾二行

右四首

ひとも吾は二人行かむ (卷第十三)

右四首

馬かはば妹かぢならむよしるやし石は履

よりなづみ行く見れば

まを鏡持たれど吾はしるしなし君が

或本の反歌に曰く、

ちなむかも ぼるてんんん

泉河渡瀬ふかみ吾が背子が旅ゆき衣ひづ

木反歌

馬かへ吾が背

東北土族ノ歌

○東歌  
ふましなむ一布  
麻之奈半(元)  
「布麻之半奈」

三三九

信濃道はいまのはりみちかりばねにあしふましなむくつはけわがせ (卷第十四)

右四首(三首略)信濃國歌

福のいかなる人か黒髪くろかみの白くなるまで

福 何有人香 黒髪之 白成左右 妹之

妹が音を聞く (卷第七)

音乎聞

難波人葦火たく屋の煤してあれど己が妻

難波人 葦火燎屋之 酢四手雖有 己妻

こそ常めづらしき (卷第十一)

許増 常目頗次吉

天平勝寶二年三月一日之暮眺み春苑桃李花 作歌二首 (一首略)

春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ嬌婦 (卷第十九)

いふ事は後悔ごちがひいにけり (卷第十一)

石尙 行應通 建男 戀云事 後悔在

天地にすこしいたらぬ大夫と思ひし吾や雄心もなき (卷第十二)

丈夫は友のさわきになくさる心もあら  
む我ぞ苦しき (卷第十一)  
我衣苦寸

馬の音のとどともすれば松蔭に出でてぞ

馬音之 跡籽登毛爲者 松陰爾 出曾見

馬蹄音をきき

見つるけだし君かと (卷第十一)

待ッ人が来テ異ト思ッテ出テ見カ

鶴 若君香跡

當麻真人磨妻作歌

吾がせこは何所行くらむおきつもの隠の山を今日か越ゆらむ (卷第一)

秋詞 名張山崎の御馬草にせむ

おきつもの 海邊隠り山

五七五七七

○三首は旋頭歌。

川ノ音

・なしか一勿然 (元)、「然」

水門の葦の末葉を誰か手折りし吾が背子が振る手を見むと我ぞ手折りし

此の岡に草刈る小子なしか刈りそねありつとも君が来まさむ御馬草にせむ (卷第七)

右二十三首(二十首略)柿本朝臣人麿歌集出。

妹と言へばなめしがしこししかすがにが

片心イ

妹と見多か呼ぶとおまふ

妹登曰者 無禮恐 然爲蟹 懸卷欲 言

けまくほしき言にあるかも (卷第十二)

爾有鴨

表 貴女ト呼ぶ

たらしねの母に障らばいたづらにいましも吾もことなるべき (卷第十二)

枕詞

遠慮して居ッたらん

君が来まさむ御馬草にせむ

人麿の信成

江ノ川ノ川口

・能咲八師(元)、「能咲八師」

安倍女郎の歌二首 (一首略)

安倍女郎歌二首

吾が背子はものな思ほし事しあらば火に

吾背子波 物莫念 事之有者 火爾毛水

も水にも我なけなくに (卷第四)

爾毛 吾莫七國

柿本朝臣人麿の石見國より妻に別れて

柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二

上り來る時の歌二首(一首略)并に短歌

首并短歌

石見の海 角の浦廻を、浦なしと

石見乃海 角乃浦回乎 浦無等 人社見

そ見らめ 瀧なしと一に云ふ、人こそ見ら

良目 瀧無等一云 人社見良目 能咲八

め よしるやし 浦はなくともよしる

師 浦者無友 縦畫屋師 滴者一云 無輓

やし 瀧は一に云 なくとも 鯨魚取り

鯨魚取 海邊乎指而 和多豆乃 荒磯乃

海邊をさして 渡津の 荒磯の上に か

上爾 香青生 玉藻息津藻 朝羽振 風

青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ

社依米 夕羽振流 浪社來緣 浪之共

寄せめ 夕羽振る 浪こそ來よせ 浪の

彼縁此依 玉藻成 依宿之妹乎 余思妹之手

むた 彼より此より 玉藻なす 寄り寝

露霜乃 置而之來者 此道乃 八十

し妹をよし妹がたもとを 露霜の おきてし

限毎 萬段 顧爲騰 彌遠爾 里者放奴

・波之伎余思(元)、「波之伎余思」

四 きよきその名

四五

玉藻の 寄り寝

玉藻成 依宿之妹乎

・反歌二首(元)、「反歌」

來れば この道の 八十隈毎に 萬たび  
かへりみすれど いや遠に 里は離りぬ  
いや高に 山も越え來ぬ 夏草の 思ひ  
妻えて 偲ぶらむ 妹が門見む 靡けこ  
の山 コノ山ヨノイタクレ

益高爾 山毛越來奴 夏草之 念之奈要  
而 志怒布良武 妹之門將見 靡此山  
反歌二首

反歌二首

石見のや高角山の木の間より我が振る袖  
を妹見つらむか

小竹之葉者 三山毛清爾 亂友 吾者妹  
思 別來禮婆  
或本反歌曰

・反歌曰(金)、「反歌」

小竹の葉はみ山もさやに亂げども吾は妹  
おもふ別れ來ぬれば

石見爾有 高角山乃 木間從文 吾袂振  
乎 妹見監鴨

石見なる高角山の木の間ゆも吾が袖振る  
を妹見けむかも (卷第二)

柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首(一首略)并短歌

・わたる日の一渡  
日(金)、「度日」

あまとぶや 輕の路は 吾妹兒が 里にしあれば 勲に見まくほしけど やまず行かば 人  
目を多み まねく往かば 人知りぬべみ さね葛 後もあはむと 大船の 思ひたのみて たま  
かざる 磐垣淵の 隠のみ 戀ひつつあるに わたる日の くれぬるがごと 照る月の 雲隠る  
ごと 奥つ藻の なびきし妹は 黄葉の 過ぎていにきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 おとに  
開きてとのみ開きて 言はむすべ せむすべ知らに おとのみを 聞きてありえねば 吾が戀ふ  
る 千重の一へも なぐさむる 情もありやと 吾妹子が やまず出で見し 輕の市に 吾が立  
ち開けば 玉だすき 畝火の山に なく鳥の こゑも聞えず 玉梓の 道行く人も 獨だに 似  
るがゆかねば すべをなみ 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる 或本に、名のみ開きてありえねばと謂へる句あり。

短歌二首 (一首略)

去年見てし秋の月夜は照らせれどあひ見し妹はいや年さかる (卷第二)

河内王を豊前國鏡山に葬りし時、手持  
女王の作れる歌三首

河内王葬豊前國鏡山之時手持女王作歌  
三首

王の親魄合へや豊國の鏡の山を宮と定  
むる

王之 親魄相哉 豊國乃 鏡山乎 宮登  
定流

四きよきその名

豊國の鏡の山の岩戸立て隠りにけらし待  
てど來まさぬ  
岩戸破る手力もがも手弱き女にしあれば  
術の知らなく (卷第三)

豊國乃 鏡山之 石戸立 隠爾計良思  
雖待不來座  
石戸破 手力毛欲得 手弱寸 女有者  
爲便乃不知苦

はらから

・言不(元)「不言」

市原王の獨子を悲しめる歌一首  
言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ獨  
子にあるが苦しさ (卷第六)

市原王悲獨子歌一首  
言不問 木尙妹與兄 有云乎 直獨子爾  
有之苦者

○弟一六伴書持

・麻爾末爾(元)  
「麻爾末爾」

長逝せる弟を哀傷する歌一首并に短歌  
天離る 鄙治めにと 大王の 任のまに  
まに 出でて來し 吾を送ると あをに  
よし 奈良山過ぎて 泉河 清き河原に  
馬とどめ 別れし時に 好く行きて 吾

哀傷長逝之弟歌一首并短歌  
安麻射加流 比奈乎佐米爾等 大王能  
麻氣乃麻爾末爾 出而許之 和禮乎於久  
流登 青丹余之 奈良夜麻須疑底 泉河  
伎欲吉可波良爾 馬駐 和可禮之時爾

歸り來む 平らけく 齋ひて待てと 語  
らひて 來し日の極 玉梓の 道をた遠  
み 山河の 隔りてあれば 戀しけく  
日長きものを 見まく欲り 思ふ間に  
玉梓の 使の來れば 嬉しひと 吾が待  
ち問ふに およづれの たは言とかも  
愛しきよし な弟の命 何しかも 時し  
はあらむを はた薄 穂に出る秋の 萩  
の花 薫へる屋戸を言ふところは、この人、人  
く寢院の庭に植う。故に花  
薫へる庭と謂へるなり。 朝庭に 出で立ち  
平し 夕庭に 踏み平らげず 佐保のう  
ちの 里を行き過ぎ あしひきの 山の  
木末に 白雲に 立ちたな引くと 吾に  
告げつる 佐保山に火葬せり。故に佐保の  
ま幸くと言ひてしものを白雲に立ちたな

好去而 安禮可弊里許牟 平久 伊波比  
底待登 可多良比底 許之比乃伎波美  
多麻保許能 道乎多騰保美 山河能 弊  
奈里底安禮婆 孤悲之家口 氣奈我枳物  
能乎 見麻久保里 念間爾 多麻豆左能  
使乃家禮婆 宇禮之美登 安我麻知刀敷  
爾 於餘豆禮能 多婆許登等可毛 婆之  
伎余思 奈弟乃美許等 奈爾之加母 時  
之波安良牟乎 婆太須酒吉 穂出秋乃  
芽子花 爾保弊流屋戸乎言斯人爲性好愛花草  
花樹而多植於寢院之  
庭故謂之  
花薫庭也 安佐爾波爾 伊泥多知奈良之  
尊庭爾 敷美多比良氣受 佐保能宇知乃  
里乎往過 安之比紀乃 山能許奴禮爾  
白雲爾 多知多奈妣久等 安禮爾都氣都  
流佐保山火葬故謂之佐保乃  
宇知乃佐刀乎由吉須疑

西きよきその名

右九月(元)右  
天平十八年秋九  
月

引くと聞けば悲しも  
かからむとかねて知りせば越の海の荒磯  
の波も見せましものを (卷第十七)

右、九月二十五日、越中守大伴宿禰家持、  
遙に弟の喪を聞き、感傷みて之を作れる  
なり。

麻佐吉久登 伊比底之物能乎 白雲爾  
多知多奈妣久登 伎氣婆可奈思物  
可加良牟等 可禰底思理世婆 古之能宇  
美乃 安里蘇乃奈美母 見世麻之物能乎  
右九月二十五日越中守大伴宿禰家持遙聞  
弟喪感傷作之也。

おもふどち

〇五年—天平勝寶  
五年

五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣  
の家にて宴せる歌三首 (二首略)  
新しき年の始に思ふどちい群れて居れば  
嬉しくもあるか (卷第十九)

右の一首は大膳大夫道祖王

野遊

・淺茅が上に—淺  
茅之上爾(西)  
「淺茅之上爾」

春日野の淺茅が上におもふどち遊びし今日は忘らえめやも  
春の野にこころのべむとおもふどち來りし今日は晚れずもあらぬか (卷第十)

大宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓贈<sub>レ</sub>卿歌二首 (一首略)  
まを鏡見飽かぬ君におくれてや且夕にさびつつ居らむ

大納言大伴卿和歌二首

ここにありて筑紫や何處白雲のたな引く山の方にしあるらし  
草香江の入江にあさる蘆鶴のあなたつたつし友無しにして (卷第四)

○遣外使節に關する歌。

五とほのみかど

柿本朝臣人麿の、筑紫の國に下りし時  
海路にて作れる歌二首 (二首略)

柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首

大王の遠の朝廷と在り通ふ島門を見れば  
神代し思ほゆ (卷第三)

大王之 遠乃朝廷跡 蟻通 島門乎見者  
神代之所念

柿本朝臣人麻呂驛旅歌八首 (七首略)

天離る夷の長道ゆ戀ひ來れば明の門より倭島見ゆ 一本に云ふ、家門の當り見ゆ (卷第三)

好去好來の歌一首 反歌二首

好去好來歌一首 反歌二首

神代より 言傳てけらく 虚みつ 大和  
の國は 皇神の 嚴しき國 言靈の 幸  
はふ國と 語り繼ぎ 言ひ繼がひけり

神代欲理 云傳介良久 虚見通 倭國者  
皇神能 伊都久志吉國 言靈能 佐吉播  
布國等 加多利繼 伊比都賀比計理 今

・戴持且(代匠記の說)、「載持且」

・道引麻遠志(細)、「道引麻遠志」

・阿遲可遠志(神)、「阿庭可遠志」  
・多太(西)、「多大」

今の世の 人も悉 目の前に 見たり知  
りたり 人多に 満ちてはあれども 高  
光る 日の朝延 神ながら 愛の盛に  
天の下 奏し給ひし 家の子と 擇び給  
ひて 勅旨命として、大 戴き持ちて 唐の  
遠き境に 遣され 罷り坐せ 海原の  
邊にも沖にも 神留り 傾き坐す 諸の  
大御神等 船の舳に反して、ふな 導き申し  
天地の 大御神等 大和の 大國靈 ひ  
さかたの 天の御虚ゆ 天翔り 見渡し  
給ひ 事畢り 還らむ日は 又更に 大  
御神等 船の舳に 御手打ち懸けて 墨  
繩を 延へたる如く あちかをし 值嘉  
の岬より 大伴の 御津の濱邊に 直泊  
に 御船は泊てむ 恙無く 幸く坐して

五とほのみかど

世能 人母許等期等 目前爾 見在知在  
人佐播爾 満且播阿禮等母 高光 日御  
朝廷 神奈我良 愛能盛爾 天下 奏多  
麻比志 家子等 撰多麻比天 勅旨反云  
戴持且 唐能 遠境爾 都加播佐禮 麻  
加利伊麻勢 宇奈原能 邊爾母奧爾母  
神豆麻利 宇志播吉伊麻須 諸能 大御  
神等 船舳爾反云布奈 道引麻遠志 天地  
能 大御神等 倭 大國靈 久堅能 阿  
麻能見虚喻 阿麻賀氣利 見渡多麻比  
事畢 還日者 又更 大御神等 船舳爾  
御手打掛且 墨繩袁 播倍多留期等久  
阿遲可遠志 智可能舳欲利 大伴 御津  
濱備爾 多太泊爾 美船播將泊 都都美  
無久 佐伎久伊麻志且 速歸坐勢

五三

早歸りませ

反歌

大伴の御津の松原かき掃きて我立ち待たむ早歸りませ

大伴 御津松原 可吉掃且 和禮立待 速歸坐勢

難波津に御船泊てぬと聞え來ば紐解き放けて立走りせむ (卷第五)

難波津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣且 多知婆志利勢武

天平五年三月一日良の宅に對面して獻ること

天平五年三月一日良宅對面獻三日山上憶良 謹上 大唐大使卿記室

○大唐大使卿一多治比廣成

とは三日なり。山上憶良謹みて大唐大使卿の記室に上る。

天平五年贈入唐使一歌一首并短歌 作主未詳。

そらみつ やまとの國 あをによし 平城の京師ゆ おし照る 難波にくだり 住吉の 三津に 船のり 直渡り 日の入る國に 遣はさる わがせの君を 懸けまくの ゆゆし恐き 墨吉の 吾が大御神 船のへに うしはきいまし 船どもに 御立たし座して さしよらむ 磯の埼埼 こぎはてむ 泊泊に 荒き風 浪にあはせず 平けく 率てかへりませ もとの國家に

反歌一首

おきつ浪邊波な越しそ君が船こぎかへり來て津に泊つるまで (卷第十九)

○天平八年、遣新羅使。

壹岐島に到りて、雪連宅滿が忽ち鬼病に遇ひて死去れる時作れる歌一首并

到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作

に短歌 (短歌略)

歌一首并短歌

天皇の 遠の朝廷と 韓國に 渡る吾が

須賣呂伎能 等保能朝廷等 可良國爾

背は 家人の 齋ひ待たねか 直身かも

和多流和我世波 伊敝妣等能 伊波比麻 多爾可 多太未可母 安夜麻知之家牟

過ちしけむ 秋さらば 歸りまさむと

安吉佐良婆 可敝里麻左牟等 多良知爾

たらちねの 母に申して 時も過ぎ 月

能 波波爾麻乎之且 等伎毛須疑 都奇

も經ぬれば 今日か來む 明日かも來む

母倍奴禮婆 今日可許牟 明日可蒙許武

と 家人は 待ち戀ふらむに 遠の國

登 伊敝比等波 麻知故布良牟爾 等保

未だも着かず 大和をも 遠く離りて

能久爾 伊麻太毛都可受 也麻等乎毛

石が根の 荒き島根に 宿する君

登保久左可里且 伊波我爾乃 安良伎之 麻爾爾 夜杼里須流君

(卷第十五)

・麻乎之且(類)、「麻乎之且」

・多太未可母(類)、「多太未可母」

○天平勝寶三年、遣唐使。  
清河(元)、清河參議從四位下遣唐使

春日にて神を祭る日、藤原太后の御作歌一首、即ち入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ。

春日祭神之日藤原太后御作歌一首。即賜入唐大使藤原朝臣清河。

大舶に真楫繁貫き此の吾子をから國へ遣る齋へ神たち (卷第十九)

大舶爾 真楫繁貫 此吾子乎 韓國邊遣伊波敝神多智

大使藤原朝臣清河歌一首

春日野にいつく三諸の梅の花榮えて在り待て還り來るまで (卷第十九)

○閏三月、天平勝寶四年

閏三月、衛門督大伴古慈悲宿禰の家にて、入唐副使同じき胡麿宿禰等を餞せる歌二首 (二首略)

閏三月於衛門督大伴古慈悲宿禰家餞之入唐副使同胡麿宿禰等歌二首

から國に往き足らはして歸り來むますらたけをに御酒たてまつる (卷第十九)

韓國爾 由伎多良波之氏 可敝里許牟麻須良多家乎爾 美伎多氏麻都流

右の一首は、多治比真人鷹主が副使大伴

右一首多治比真人鷹主壽副使大伴胡麿宿

胡麿宿禰を壽くなり。

禰也。

阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一首

天雲のそきへのきはみ吾が念へるきみに別れむ日近くなりぬ (卷第十九)

右件歌者傳誦之人越中大目高倉人種麻呂是也。但年月次者隨聞之時載於此焉。

・真人土元(眞人古)

民部少輔多治真人土作歌一首

住吉にいつく祝が神言と行くとも來とも舶は早けむ (卷第十九)

○天平寶字二年、遣渤海使。

二月十日、内相の宅に、渤海大使小野

二月十日於内相宅餞渤海大使小野田守

田守朝臣等を餞する宴の歌一首

朝臣等宴歌一首

あをうなばら風波なびき行くさ來さつつむことなく船は早けむ (卷第二十)

阿乎宇奈波良 加是奈美奈妣伎 由久左 久佐 都都牟許等奈久 布禰波波夜家無

右の一首は右中辨大伴宿禰家持

いまだ

右一首右中辨大伴宿禰家持 未誦之。

誦せず。

五とほのみかど

五七

○防人の歌。

六 しこのみたて

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と  
出で立つ吾は (卷第二十)

右の一首は火長今奉部與會布

那布與利波 可敵里見奈久且 意富伎美  
乃 之許乃美多且等 伊渥多都和例波

右一首火長今奉部與會布

○下野國の防人

霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は  
來にしを (卷第二十)

右の二首(二首略)は那賀郡上丁大舍人部  
千文

阿良例布理 可志麻能可美乎 伊能利都  
都 須米良美久佐爾 和例波伎爾之乎

右二首那賀郡上丁大舍人部千文

○常陸國の防人

千文

○下野國の防人

阿米都知乃 可美乎伊乃里且 佐都夜奴伎  
都久之乃之麻乎 佐之且伊久和例波 (卷第二十)

右一首火長大田部荒耳

大君の命かしこみ磯にふり海原渡る父母  
を置きて (卷第二十)

右の一首は助丁丈部造人麿

於保吉美能 美許等可之古美 伊蘇爾布  
理 宇乃波良和多流 知知波波乎於伎且

右一首助丁丈部造人麿

○相模國の防人

・美他(元)「美仁」

大君の命かしこみ夢の共眞寢か渡らむ長  
けこの夜を (卷第二十)

右の一首は相馬郡大伴部子羊

於保伎美能 美已等加之古美 由美乃美  
他 佐尼加和多良牟 奈賀氣已乃用乎

右一首相馬郡大伴部子羊

○下總國の防人

・等能妣久(元)「多奈妣久」  
・古與且(元)「古江且」

○信濃國の防人  
・麻爲且枳爾之乎  
(元)「麻爲且枳麻之乎」

○下總國の防人

意保伎美能 美已等可之古美 阿乎久牟乃  
等能妣久夜麻乎 古與且伎怒加牟 (卷第二十)

右一首小長谷部等麿

於保伎美能 美許等爾作例波 知知波波乎  
以波比弊等於枳且 麻爲且枳爾之乎 (卷第二十)

右一首結城郡雀部廣島

追ひて防人の悲別の心を痛みて作れる

歌一首并に短歌(短歌略)

六 しこのみたて

追痛防人悲別之心作歌一首并短歌

天皇乃 等保能朝廷等 之良奴日 筑紫

天皇の遠の朝廷と 不知火 筑紫の國  
 は 賊守る 鎮の城ぞと 聞し食す 四  
 方の國には 人多に 満ちてはあれど  
 鶏が鳴く 東 男は 出で向ひ 顧みせ  
 ずて 勇みたる 猛き軍卒と 勞ぎ給ひ  
 任のまにまに たらちねの 母が目離れ  
 て 若草の 妻をも纏かず あらたまの  
 月日數みつ つ 蘆が散る 難波の御津に  
 大船に 眞權繁貫き 朝なぎに 水手整  
 へ 夕汐に 楫引き撓り 率ひて 漕ぎ  
 ゆく君は 波の間を い行きさぐくみ  
 眞幸くも 早く到りて 大王の 命のま  
 にま 丈夫の 心を持ちて 在り廻り  
 事し畢らば 恙はず 歸り來ませと 齋  
 瓮を 床邊にすゑて 白妙の 袖折り反

國波 安多麻毛流 於佐倍乃城曾等 聞  
 食 四方國爾波 比等佐波爾 美知且波  
 安禮村 登利我奈久 安豆麻乎能故波  
 伊田牟可比 加弊里見世受且 伊佐美多  
 流 多家吉軍卒等 禰疑多麻比 麻氣乃  
 麻爾麻爾 多良知禰乃 波波我目可禮且  
 若草能 都麻乎母麻可受 安良多麻能  
 月日餘美都都 安之我知流 難波能美津  
 爾 大船爾 末加伊之自奴伎 安佐奈藝  
 爾 可故等登能倍 由布思保爾 可知比  
 伎乎里 安騰母比且 許藝由久伎美波  
 奈美乃間乎 伊由伎佐具久美 麻佐吉久  
 母 波夜久伊多里且 大王乃 美許等能  
 麻爾末 麻須良男乃 許己呂乎母知且  
 安里米具里 事之乎波良婆 都都麻波受

・事之乎波良婆  
 (元)、「事之乎波  
 良波」

○二月八日 天平  
 勝寶七年

し ぬばたまの 黒髪敷きて 長き日を  
 待ちかも戀ひむ 愛しき妻らは

(卷第二十)

右二月八日、兵部少輔大伴宿禰家持

可敵里伎麻勢登 伊波比倍乎 等許敵爾  
 須惠且 之路多倍能 蘇田遠利加敵之  
 奴婆多麻乃 久路加美之伎且 奈我伎氣  
 遠 麻知可母戀牟 波之伎都麻良波

右二月八日兵部少輔大伴宿禰家持

○下野國の防人

月日やは過ぐは往けども 母父が玉の姿は  
 忘れ爲なふも (卷第二十)

右の一首は、都賀郡上丁中臣部足國

右一首都賀郡上丁中臣部足國

美豆等利乃 多知能已蘇伎爾 父母爾 毛能波須價爾且

已麻叙久夜志伎 (卷第二十)

右一首上丁有度部牛麿

知知波々江 已波比且麻多禰 豆久志奈流 美豆久白玉

等里且久麻且爾 (卷第二十)

右一首川原虫麿

○駿河國の防人

・有度部(元)、「有  
 度郡」

○駿河國の防人

六しこのみたて

○駿河國の防人

和須良牟砥 努由伎夜麻由伎 和例久禮等 和我知波波波 和須例勢努加毛 (卷第二十)

右一首商長首鷹

知知波々母 波奈爾母我毛夜 久佐麻久良 多妯波由久等母 佐佐已且由加牟 (卷第二十)

右一首佐野郡丈部黑當

○遠江國の防人

知知波波我 可之良加伎奈且 佐久安禮天 伊比之氣等婆是 和須禮加禰津流 (卷第二十)

右一首丈部稻鷹

○駿河國の防人

・氣等婆是(元)「古度裝置」

知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 奴佐麻都里 伊波負伊能知波 意毛知我多米 (卷第二十)

右一首主帳頃科郡神人部子忍男

○信濃國の防人

麻氣波之良 寶米且豆久禮留 等乃能其等 已麻勢波波刀自 於米加波利勢受 (卷第二十)

右一首坂田部首鷹

○駿河國の防人

等伎騰吉乃 波奈波佐家登母 奈爾須禮會 波波登布波奈乃 佐吉低已受祢牟 (卷第二十)

○遠江國の防人

右一首防人山名郡丈部眞鷹

阿母刀自母 多麻爾母賀母夜 伊多太伎且 美都良乃奈可爾 阿敏麻可麻久母 (卷第二十)

右一首津守宿禰小黒栖

○下野國の防人

可良已呂茂 須會爾等里都伎 奈苦古良乎 意伎且會伎怒也 意母奈之爾志且 (卷第二十)

右一首國造小縣郡他田舍人大島

○信濃國の防人

・伊牟(元)「伊毛」

防人に發たむさわきに家の妹がなるべき 佐伎牟理爾 多多牟佐和伎爾 伊敏能伊

事を言はず來ぬかも (卷第二十) 牟何 奈流敏伎已等乎 伊波須伎奴可母

右の二首(一首略)は茨城郡若舍人部廣足

右二首茨城郡若舍人部廣足

○常陸國の防人

多知許毛乃 多知乃佐和伎爾 阿比美且之 伊母加己己呂波 和須禮世奴可母 (卷第二十)

右一首長狹郡上丁丈部與呂鷹

○上總國の防人

時に臨める

臨時

★しこのみたて

・間亂者誰(元)  
「間亂者許誰」

翫 霽

今年行く新島守が麻衣肩の紙まゐのは誰か取り  
見む (卷第七)

今年去 新島守之 麻衣 肩乃間亂者  
誰取見

六四

○下總國の防人

阿米都之乃 可未爾奴佐於伎 伊波比都々 伊麻世和我世奈 阿禮乎之毛婆婆 (卷第二十)

右八首(七首略)昔年防人歌矣。主典刑部少錄正七位上曆余伊美吉諸君抄寫贈兵部少輔大伴宿禰家持。

多妣等弊等 麻多妣爾奈理奴 以弊乃母加 枳世之己呂母爾 阿加都枳爾迦理 (卷第二十)

右一首占部虫麿

松の木けの竝みたる見れば家人の吾わを見送  
ると立たりし如もころ (卷第二十)

麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等  
乃 和例乎美於久流等 多多理之母己呂

右の一首は、火長物部眞島

右一首火長物部眞島

○足下郡一足柄下

郡のこと。郡名  
を二字の好字に  
するために「柄」  
の字を省略す。

夜蘇久爾波 那爾波爾都度比 布奈可射里 安我世武比呂乎 美毛比等母我母 (卷第二十)

右一首足下郡上丁丹比部國人

○相模國の防人

奈爾波都爾 余會比余會比呂 氣布能日夜 伊田呂麻可良武 美流波波奈之爾 (卷第二十)

右一首鎌倉郡上丁丸子連多麿

六しこのみたて

六五

○自然及び四季に關する歌。

七ふじのたかね

山部宿禰赤人の富士の山を望める歌一首并に短歌

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き  
駿河なる 富士の高嶺を 天の原  
ふり放け見れば 渡る日の 影も隠ろひ  
照る月の 光も見えず 白雲も い行き  
憚り 時じくぞ 雪は降りける 語り繼ぎ  
言ひ繼ぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田兒の浦のうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける (卷第三)

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌

天地之 分時從 神左備手 高貴寸 駿  
河有 布士能高嶺乎 天原 振放見者  
度日之 陰毛隱比 照月乃 光毛不見  
白雲母 伊去波伐加利 時自久曾 雪者  
落家留 語告 言繼將往 不盡能高嶺者

反歌

田兒之浦從 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺爾 雪波零家留

・波伐加利(古)、「波代加利」

時に臨める

曉あかこと夜烏鳴けどこの山上をかの木末こゝろの上は  
いまだ静けし (卷第七)

臨時

曉跡 夜烏雖鳴 此山上之 木末之於者  
未静之

湯原王芳野にて作れる歌一首

吉野なる夏實の河の川淀に鴨を鳴くなる  
山かげにして (卷第三)

湯原王芳野作歌一首

吉野爾有 夏實之河乃 川余杼爾 鴨曾鳴成 山影爾之氏

○同じ月一天平十六年正月

同じ月十一日、活道いくぢの岡に登り、一株の松の下に集ひて飲いせる歌二首(一首略)  
一つ松幾代か歴ぬる吹く風の聲の清すめる  
は年深みかも (卷第六)

一首

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二  
一松 幾代可歴流 吹風乃 聲之清者  
年深香聞

右の一首は市原王の作れる。

右一首市原王作。

柿本朝臣人麿の、近江の國より上り來し時、宇治河の邊に至りて作れる歌一首  
もののふの八十字治河の網代木にいさよふ波の行方知らずも (卷第三)

柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作歌一首  
物乃部能 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經浪乃 去邊白不母

○故太政大臣藤原不比等  
太政大臣(神)、「大政大臣」  
生ひにけり生爾家里(神)、「生家里」

山部宿禰赤人詠故太政大臣藤原家之山池歌一首  
昔の舊き堤は年深み池の激に水草生ひにけり (卷第三)

雲を詠める  
痛足河河浪立ちぬ卷目の齋槻が嶽に雲居立てるらし  
あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る (卷第七)

詠雲  
痛足河 河浪立奴 卷目之 由槻我高仁  
雲居立有良志  
足引之 山河之瀬之 響苗爾 弓月高  
雲立渡  
右二首は柿本朝臣人麿之歌集に出づ。

ねばたまの夜さり來れば卷向の川音高しもあらしかも疾き (卷第七)  
右二首(一首略)柿本朝臣人麿之歌集出。

雲を詠める  
大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立てる白雲 (卷第七)

詠雲  
大海爾 島毛不在爾 海原 絶塔浪爾  
立有白雲  
右一首は伊勢の從駕に作れる。  
右一首伊勢從駕作。

・そがひに「背ヒ爾元」「背上爾」  
・潮干満ちて「潮干満但(金)」「潮干満伊」

神龜元年甲子冬十月五日。幸于紀伊國時。山部宿禰赤人作歌一首并短歌  
やすみしし わご大王の 常宮と 仕へ奉れる さひが野ゆ そがひに見ゆる 奥つ島 清きなぎさに 風吹けば 白浪さわき 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然ぞ尊き 玉津島やま  
奥つ島荒磯の玉藻潮干満ちて隠るひゆかば念ほえむかも  
若の浦にしほ満ち來れば滴を無み葦邊を指してたづ鳴き渡る (卷第六)  
右年月不記。但稱從駕玉津島也。因今檢注行幸年月。以載之焉。  
七ふじのたかね

春

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たな  
びく春立つらしも (卷第十)

久方之 天芳山 此夕 霞霏微 春立下  
右柿本朝臣人麿歌集出。

右は柿本朝臣人麿の歌集に出づ。

歎 舊

寒過ぎて暖し來れば年月は新なれども人は舊り去く  
物皆は新しき吉し唯人は舊りぬるのみし宜しかるべし (卷第十)

志貴皇子の權の御歌一首

志貴皇子權御歌一首

石灑ぐ垂水の上のさ蕨の萌え出づる春に  
なりにけるかも (卷第八)

石灑 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出  
春爾 成來鴨

山部宿禰赤人歌四首 (三首略)

春の野にすみれ採みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける (卷第八)

山部宿禰赤人作歌二首(二首略)并短歌

いめ射目元、  
「射固」

やすみしし わご大王は み吉野の あきつの小野の 野の上には とみ居る置きて み山には  
いめ立て渡し 朝獵に しし履み起し 夕狩に とり鬮み立て 馬竝めて 御獵ぞ立たす 春の  
茂野に

反歌一首

あしひきの山にも野にも御獵人さつ矢手挟みみだれたり見ゆ (卷第六)  
右不審先後。但以便故載於此次。

帥老(京)「帥老」

梅花の歌三十二首(三十首略)并序

梅花歌三十二首并序

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃  
まりて、宴會を申ぶ。時に初春の令月、  
氣淑く風和み、梅は鏡の前の粉を披き、  
蘭は珮の後の香を薫らす。加以、曙の  
嶺に雲を移せば、松は羅を掛けて蓋を

天平二年正月十三日。萃于帥老之宅。  
申宴會也。于時初春令月。氣淑風和。  
梅披鏡前之粉。蘭薰珮後之香。加以曙  
嶺移雲。松掛羅而傾蓋。夕岫結霧。鳥  
封穀而迷林。庭舞新蝶。空歸故雁。於

掛羅而(西)、「掛  
羅勿」  
封穀(西)、「封穀」

七ふじのたかね

七一

・忘言(神)「忘言」

・翰苑西「翰苑」  
詩(神)「詩」

・紀卿(神)「紀卿」  
・佐久良(類)「久良」

傾け、夕の岫に霧を結べば、鳥は穀に封められて林に迷ふ。庭には新しき蝶舞ひ、空には故つ雁歸る。ここに天を蓋にし、地を座にし、膝を促け、觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然としてみづから放にし、快然としてみづから足る。若し翰苑にあらすば、何を以ちてか情を據べむ。詩に落梅の篇を紀せり。古と今とそれ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して聊か短詠を成すべし。

是蓋天坐地。促膝飛觴。忘言一室之裏。開衿煙霞之外。淡然自放。快然自足。若非翰苑。何以擅情。詩紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。武都紀多知。波流能吉多良婆。可久斯許。曾。烏梅平乎利都都。多努之岐平倍米。大貳。紀卿。烏梅能波奈。佐企且知理奈婆。佐久良婆。那。都伎且佐久倍久。奈利爾且阿良受也。藥師張氏嗣子

正月立ち春の來らば斯くしこそ梅を折り  
つつ樂しき竟へめ大貳 紀卿  
梅の花咲きて散りなば櫻花繼ぎて咲くべ  
くなりにてあらずや藥師張氏嗣子 (卷第五)

櫻花の歌一首并に短歌

をとめ等が 挿頭のために 遊士が 縷のためと 敷き坐せる 國のはたてに 咲きにける 櫻の花の 匂ひはもあなに

櫻花歌一首并短歌

嬌嬌等之 頭挿乃多米爾 遊士之 縷之多米等 敷座流 國乃波多且爾 開爾鷄類 櫻花能 丹穗日波母安奈爾

反歌

反歌

去年の春逢へりし君に戀ひにてし櫻の花  
は迎へけらしも (卷第八)

去年之春 相有之君爾 戀爾手師 櫻花者 迎來良之母

右の二首は若宮年魚麻呂の誦へる。

右二首若宮年魚麻呂誦之。

詠花

あしひきの山の間照らす櫻花この春雨に散り去かむかも (卷第十)

○二十三日一太平  
勝實五年二月。  
大伴家持の歌。

二十三日、興に依りて作れる歌二首

春の野に霞たなびきうら悲しこの暮影に

二十三日依興作歌二首

春野爾 霞多奈妣伎 宇良悲 許能暮影

七ふじのたかね

七三

驚悔くも

わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそ  
けきこの夕かも (卷第十九)

爾 駕奈久母

和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於  
等能可蘇氣伎 許能由布敵可母

○二十五日—天平

勝寶五年二月。  
大伴家持の歌。

二十五日作歌一首

うらうらに照れる春日にひばりあがり情悲しもひとりしおもへば (卷第十九)

春日遅々鶴鷹正啼。悽惻之意非レ歌難レ撥耳。仍作此歌式展レ締緒 (下略)

厚見王の歌一首

かはづ鳴く甘南備河にかけ見えて今か咲  
くらむ山吹の花 (卷第八)

厚見王歌一首

河津鳴 甘南備河爾 陰所見而 今香開  
良武 山振乃花

夏

天平感寶元年閏五月六日以來、小旱を  
起して、百姓の田畝稍凋める色あり。

天平感寶元年閏五月六日以來。起小旱。  
百姓田畝稍有凋色也。至于六月朔日。

六月朔日に至りて、忽ち雨雲の氣を見、

忽見雨雲之氣。仍作雲歌一首 短歌一絶

仍りて作れる雲の歌一首 短歌一絶

須賣呂伎能 之伎麻須久爾能 安米能之

天皇の 敷きます國の 天の下 四方の

多 四方能美知爾波 宇麻乃都米 伊都

道には 馬の蹄 い盡す極 船の袖の

久須伎波美 布奈乃倍能 伊波都流麻泥

い泊つるまでに 古よ 今の現に 萬調

爾 伊爾之敵欲 伊麻乃乎都頭爾 萬調

奉る長上と 作りたる 其のなりはひを

麻都流都可佐等 都久里多流 曾能奈里

雨降らず 日の重れば 植ゑし田も 詩

波比乎 安米布良受 日能可左奈禮波

きし島も 朝ごとに 凋み枯れ行く 其

宇惠之田毛 麻吉之波多氣毛 安佐其登

を見れば 心を痛み 緑兒の 乳乞ふが

爾 之保美可禮由苦 曾乎見禮婆 許己

ごとく 天つ水 仰ぎてぞ待つ あしひ

呂乎伊多美 彌騰里兒能 知許布我其登

きの 山のをりに この見ゆる 天の

久 安麻都美豆 安布藝且曾麻都 安之

白雲 海神の 沖つ宮邊に 立ち渡り

比奇能 夜麻能多乎理爾 許能見由流

との曇り合ひて 雨も賜はね

安麻能之良久母 和多都美能 於枳都美

反歌一首

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降

夜敵爾 多知和多理 等能具毛利安比且  
安米母多麻波爾

らぬか心足ひに (卷第十八)

右の二首は、六月一日の晩頭、守大伴宿  
禰家持作れり。

反歌一首

許能美由流 久毛保妣許里豆 等能具毛  
理 安米毛布良奴可 許己呂太良比爾

右二首六月一日晩頭。守大伴宿禰家持作  
之。

寄日

六月の地さへ割けて照る日にも吾が袖乾めや君にあはずして (卷第十)

大伴村上の橘の歌一首

吾が屋前の花橘を霍公鳥來鳴き動めて本  
に散らしつ (卷第八)

大伴村上橘歌一首

吾屋前乃 花橘乎 霍公鳥 來鳴令動而  
本爾令散都

詠鳥

雨霽れし雲に副ひて霍公鳥春日を指して此ゆ鳴き度る (卷第十)

詠花

かくはしき花橘を玉に貫き送らむ妹はみつれてもあるか (卷第十)

秋

○天皇―天智天皇

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山  
の萬花の艶と秋山の千葉の彩を競はし  
め給ふ時、額田王の歌をもちてことわ  
れる歌

天皇詔内大臣藤原朝臣。競春山萬花之  
艶秋山千葉之彩時。額田王以歌判之歌

冬ごもり 春さり來れば 鳴かざりし  
鳥も來鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれ  
ど 山を茂み 入りても取らず 草深み  
取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては  
黄葉をば 取りてぞしのぶ 青きをば  
置きてぞ歎く そこし恨めし 秋山吾は

冬木成 春去來者 不喧有之 鳥毛來鳴  
奴 不開有之 花毛佐家禮杼 山乎茂  
入而毛不取 草深 執手母不見 秋山乃  
木葉乎見而者 黄葉乎婆 取而曾思努布  
青乎者 置而曾歎久 曾許之恨之 秋山  
吾者

・思努布(元)、「思  
奴布」

(卷第一)

花を詠める

眞葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野  
の萩が花散る (卷第十)

詠花

眞葛原 名引秋風 吹毎 阿太乃大野之  
芽子花散

詠花

・思ひて―思手  
(類)、「思乎」  
・吾は―吾者(哀)、  
「吾等者」

我が屋前の芽子の若末長し秋風の吹きなむ時に開かむと思ひて  
此の暮秋風吹きぬ白露に荒争ふ芽子の明日咲かむ見む  
人皆は芽子を秋と云ふ縦し吾はを花が末を秋とは言はむ (卷第十)

湯原王の蟋蟀の歌一首

暮月夜心もしのに白露の置く此の庭に蟋  
蟀鳴くも (卷第八)

湯原王蟋蟀歌一首

暮月夜 心毛思怒爾 白露乃 置此庭爾  
蟋蟀鳴毛

大伴宿禰家持の秋の歌三首(二首略)

さを鹿の胸別にかも秋萩の散り過ぎにけ  
る盛かも去ぬる (卷第八)

大伴宿禰家持秋歌三首

狹尾壯鹿乃 智別爾可毛 秋芽子乃 散  
過鶏類 盛可毛行流

右は、天平十五年癸未秋八月、物色を見  
て作れり。

右天平十五年癸未秋八月見物色作。

詠鹿鳴

山の邊にい去くさつをはおほかれど山にも野にもさを鹿鳴くも  
さを鹿の妻整ふと鳴く音の至らむ極靡け芽子原 (卷第十)

冬

武藏の小崎の沼の鴨を見て作れる歌一  
首

埼玉の小崎の沼に鴨を翼さる己が尾に降  
り置ける霜を掃ふとにあらし (卷第九)

見武藏小崎沼鴨作歌一首

前玉之 小崎乃沼爾 鴨曾翼霧 己尾爾  
零置流霜乎 掃等爾有斯

○旋頭歌。

セふじのたかね

雪を詠める

夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだ  
らにみ雪降りたり一に云ふ、庭もほどろに雪ぞ  
降りたる (卷第十)

詠雪

夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太  
良爾 三雪落有一云庭裏保存呂爾雪曾零而有

・陰らひにつつー  
陰相管(元)「隠  
相管」

詠雪

甚だも零らぬ雪故こちたくも天つみ空は陰らひにつつ (卷第十)

八くさぐさの歌

柿本朝臣人麿の歌集の歌に曰く

葦原の 水穂の國は 神ながら 言擧せ  
ぬ國 然れども 言擧ぞ吾がする 言幸  
く 眞福く坐せと 恙なく 福く坐さば  
荒磯浪 ありても見むと 百重波 千重  
浪にしき 言擧す吾は 言擧す吾は

反歌

敷島の日本の國は言靈の佐くる國ぞま福  
くありこそ (卷第十三)

右五首(三首略)

八くさぐさの歌

柿本朝臣人麿歌集歌曰

葦原 水穂國者 神在隨 事擧不爲國  
雖然 辭擧叙吾爲 言幸 眞福座跡 恙  
無 福座者 荒磯浪 有毛見登 百重波  
千重浪爾敷 言上爲吾 言上爲吾

反歌

志貴島 倭國者 事靈之 所佐國叙 眞  
福在與具

右五首

・言上爲吾言上爲  
吾(元)、「言上  
爲吾」

・「在與具」を萬葉  
考は「在乞言」の  
誤となす。

○採録せる黒人の歌三首は参考までを含む。

高市連黒人の羈旅の歌八首(五首略)  
旅にして物戀しきに山下の赤のそは船沖  
にこぐ見ゆ

高市連黒人羈旅歌八首  
客爲而 物戀敷爾 山下 赤乃曾保船  
奥榜所見

櫻田へ鶴鳴き渡る年魚市がたしほ干にけらし鶴鳴き渡る  
四極山うち越え見れば笠縫の島榜ぎ隠る棚無し小舟 (卷第三)

齋種蒔く新墾の小田を求めむと足結出で  
沾れぬこの川の瀬に (卷第七)

湯種蒔 荒木之小田矣 求跡 足結出所  
沾 此水之湍爾

志貴皇子の御歌一首

鼯鼠は木末求むとあしひきの山の獵夫に  
あひにけるかも (卷第三)

志貴皇子御歌一首  
牟佐佐婢波 木末求跡 足日木乃 山能  
佐都雄爾 相爾來鴨

倭人を謗る歌一首

謗倭人歌一首

奈良山の兒手柏の兩面に左にも右にも倭  
人の徒 (卷第十六)

奈良山乃 兒手柏之 兩面爾 左毛右毛  
倭人之友

右の歌一首は、博士消奈行文大夫作れり。

右歌一首博士消奈行文大夫作之。

○十年一天平十年

十年戊寅、元興寺の僧の自ら嘆く歌一  
首

首

白珠は人に知らえず知らずともよし知ら  
ずとも吾し知られば知らずともよし

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首  
白珠者 人爾所不知 不知友縱 雖不知  
吾之知有者 不知友任意

(卷第六)

右一首。或云。元興寺之僧獨覺多智。未

・狎侮(代匠記の  
説)「押侮」

・嘆「贊」(京)と  
あり「贊」(京)と  
りしとも訓み得。

右の一首は、或るひと云ふ、元興寺の僧  
獨り覺りて智多けれども、未だ顯聞する  
ところあらず。衆諸狎れ侮る。これによ

有顯聞。衆諸狎侮。因此僧作此歌自嘆身  
才也。

りて、僧この歌を作りて、みづから身の  
才を嘆くなり。

安積香山影さへ見ゆる山の井の淺き心を

安積香山 影副所見 山井之 淺心乎

八くさぐさの歌

八三

吾が思はなくに (卷第十六)

吾念莫國

此歌類「其歌」  
解脫類「解脫」

右の歌は、傳へ云ふ。葛城王陸奥國に遣されし時、國司祇承緩意異に甚し。時に王の意悦ばず、怒の色面に顯る。飲饌を設けしかども、背へて宴樂せざりき。ここに前の采女あり、風流の娘子なり。左の手に觴を捧げ右の手に水を持ち王の膝を撃ちて、此の歌を詠みき。ここに乃ち王の意解け悦びて、樂飲せること終日なりき。

右歌傳云。葛城王遣于陸奥國之時。國司祇承緩意異甚。於時王意不悅怒色顯面。雖設飲饌不肯宴樂。於是前采女。風流娘子。左手捧觴右手持水擊之王膝而詠此歌。爾乃王意解悅樂飲終日。

〇七年一天平七年

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌

たくづのの 新羅の國ゆ 人ごとを よしと聞かして 問ひ放くる 親族兄弟 無き國に 渡り來まして 太皇の 敷きます國に うちひさす 京しみみに 里家は さはにあれども いかさまに 念ひけめかも つれもなき 佐保の山邊に 哭く兒なす 慕ひ來まして きたへの 宅をも造り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ 座ししものを 生者 死ぬとふことに 免る

えぬ ものにしあれば 憑りし 人の盡 草枕 客なるほどに 佐保河を 朝川渡り 春日野を 背向に見つつ あしひきの 山邊を指して 晚闇と 隠りましぬれ 言はむすべ 爲むすべ 知らに 徘徊り ただ獨して 白たへの 衣袖干さず 嘆きつつ 吾が泣く涙 有間山 雲居た な引き 雨に零りきや

反歌

留め得ぬ壽にしあればきたへの家ゆは出でて雲隠りにき (卷第三)

名曰「類」曰「此喪類」此哀

右新羅國尼名曰理願也。遠感王德。歸化聖朝。於時寄住大納言大將軍大伴卿家。既遷數紀一焉。惟以天平七年乙亥。忽沈運病。既趣泉界。於是大家石川命婦依餅藥事。往有間溫泉而不會。此喪。但郎女獨留葬。送屍柩既訖。仍作此歌贈入溫泉。

水江の浦島子を詠める一首并短歌

詠水江浦島子一首并短歌

春の日の 霞める時に 住吉の 岸に出  
で居て 釣船の とをらふ見れば 古の  
事ぞ念ほゆる 水江の 浦島の兒が 堅  
魚釣り 鯛釣り 矜り 七日まで 家にも  
來ずて 海界を 過ぎて 榜ぎ行くに 海

春日之 霞時爾 墨吉之 岸爾出居而  
釣船之 得乎良布見者 古之 事會所念  
水江之 浦島兒之 堅魚釣 鯛釣矜 及  
七日 家爾毛不來而 海界乎 過而榜行  
爾 海若 神之女爾 遲爾 伊許藝趁

八くさぐさの歌

八五

●者不爲(藍)、「老目不爲」

若の 神の女に 遷に い傍ぎ趨ひ あ  
 ひとぶらひ こと成りしかば かき結び  
 常世に至り 海若の 神の宮の 内の重  
 の 妙なる殿に 携はり 二人入り居て  
 老もせず 死もせずして 永き世に 在  
 りけるものを 世のなかの 愚人の 吾  
 妹子に 告りて語らく 須臾は 家に歸  
 りて 父母に 事も告らひ 明日の如  
 吾は來なむと 言ひければ 妹がいへら  
 く 常世邊に また歸り來て 今のごと  
 逢はむとならば この篋 開くな努と  
 許多に 堅めし言を 住吉に 還り來り  
 て 家見れど 家も見かねて 里見れど  
 里も見かねて 恠しと そこに念はく  
 家ゆ出でて 三歳の間に 墻も無く 家

相詔良比 言成之賀婆 加吉結 常代爾  
 至 海若 神之宮乃 内隔之 細有殿爾  
 携 二人入居而 者不爲 死不爲而 永  
 世爾 有家留物乎 世間之 愚人之 吾  
 妹兒爾 告而語久 須臾者 家歸而 父  
 母爾 專毛告良比 如明日 吾者來南登  
 言家禮婆 妹之答久 常世邊爾 復變來  
 而 如今 將相跡奈良婆 此篋 開勿勤  
 常 曾己良久爾 堅目師事乎 墨吉爾  
 還來而 家見跡 宅毛見金手 里見跡  
 而 三歲之間爾 墻毛無 家滅目八跡  
 此宮乎 開而見手齒 如本 家者將有登  
 玉篋 小披爾 白雲之 自箱出而 常世  
 邊 棚引去者 立走 叫袖振 反側 足

●宮(矢)、「吾」  
●如本(藍)、「如來本」

●消失奴(類)、「清失奴」

滅せめやと この宮を 開きて見れば  
 舊の如 家はあらむと 玉篋 少し開く  
 に 白雲の 箱より出でて 常世邊に  
 たな引きぬれば 立ち走り 叫び袖振り  
 反側び 足すりしつ つ たちまちに 情  
 消失せぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒か  
 りし 髪も白けぬ ゆなゆなは 氣さへ  
 絶えて 後つひに 壽死にける 水江の  
 浦島の子が 家地見ゆ

反歌

常世邊に住むべきものを劔刀己が行から  
 鈍やこの君 (卷第九)

受利四管 頓 情消失奴 若有之 皮毛  
 皺奴 黒有之 髪毛白斑奴 由奈由奈波  
 氣左倍絶而 後遂 壽死祁流 水江之  
 浦島子之 家地見  
 反歌  
 常世邊 可住物乎 劔刀 己之行柄 於  
 曾也是君

●行柄(藍)、「心柄」

筑前國怡土郡深江村子負原、海に臨め  
 る丘の上に二つの石あり。大なるは長  
 八くさぐさの歌

筑前國怡土郡深江村子負原。臨海丘上  
 有二石。大者長一尺二寸六分。圍一尺

・一尺八寸(神)、「一寸尺八寸」

・壁(西)、「壁」

さ一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重さ十八斤五兩、小なるは長さ一尺一寸、圍一尺八寸、重さ十六斤十兩、并に皆楕圓にして、狀鶏子の如し。其の美好きこと論するに勝ふ可からず。所謂徑尺の壁是なり。或は云ふ、此の二の石は肥前國彼杵郡平敷の石、占に當りて之を取る。深江の驛家を去ること二十許里、近く路頭に在り。公私の往來に馬より下りて跪拜せずといふこと莫し。古老相傳へて曰く、往昔息長足日女命新羅國を征討けましし時、玆の兩つの石を用ちて、御袖の中に挿み著けて、以て鎮懷と爲す。實は是れ御裳の中なり。所以行人此の石を敬拜すと。乃ち歌を作りて曰く

懸けまくは あやに長し 帶比賣 神の

八寸六分。重十八斤五兩。小者長一尺一寸。圍一尺八寸。重十六斤十兩。並皆墮圓狀如鶏子。其美好者不可勝論。所謂徑尺壁是也。或云此二石者肥前國彼杵郡平敷之石當占而取之深江驛家二十許里。近在路頭。公私往來。莫不下馬跪拜。古老相傳曰。往者息長足日女命征討新羅國之時。用玆兩石挿著御袖之中。以爲鎮懷。實是御裳中矣所以行人敬拜此石。乃作歌曰

可既麻久波 阿夜爾可斯故斯 多良志比  
 暉 可尾能彌許等 可良久爾遠 武氣多  
 比良宜且 彌許々呂遠 斯豆迷多麻布等  
 伊刀良斯且 伊波比多麻比斯 麻多麻奈  
 須 布多都能伊斯乎 世人爾 斯斯斯多  
 麻比且 余呂豆余爾 伊比都具可爾等

・伊知郷(神)、「伊知郷」

命 韓國を 向け平らげて 御心を 鎮め給ふと い取らして 齋ひ給ひし 眞珠なす 二つの石を 世の人に 示し給ひて 萬代に 言ひ繼ぐがねと 海の底 沖つ深江の 海上の 子負の原に み手づから 置かし給ひて 神隨 神さび坐す 奇魂 今の現に 尊さるかも

天地のともに久しく言ひ繼げと此の奇魂敷かしけらしも (卷第五)

右の事を傳へ言ふは、那珂郡伊知郷襄島の人建部牛麻呂是なり。

和多能曾許 意根都布可延乃 字奈可美  
 乃 故布乃波良爾 美且豆可良 意可志  
 多麻比且 可武奈何良 可武佐備伊麻須  
 久志美多麻 伊麻能遠都豆爾 多布刀伎  
 呂可儻  
 阿米都知能 等母爾比佐斯久 伊比都夏  
 等 許能久斯美多麻 志可志家良斯母

右事傳言。那珂郡伊知郷襄島人建部牛麻呂是也。

美濃國多藝の行宮にて大伴宿禰東人の作れる歌一首

古ゆ人の言ひくる老人の變若とふ水ぞ名  
 八くさぐさの歌

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首  
 從古 人之言來流 老人之 變若云水會

に負ふ瀧の瀬 (卷第六)

名爾負瀧之瀬

・得てしかも一得  
之早物(元)一得  
之早物

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月よみの 持てる變若水 い取り來て 君に奉りて  
をち得てしかも

反歌

天なるや月日の如く吾が思へる公が日にけに老ゆらく惜しも (卷第十三)

右二首

○三年—天平寶字三年

○「抑此集初に雄略舒明兩帝の民を惠ませ給ひ、世の治まれる事を悦び思召す御歌より次第に載せて、今の歌を以て一部を祝ひ終へたれば、玉匣ふたみ相稱へる驗ありて、藏する所世を経て失ざるかな。」(萬葉代匠記)

三年春正月一日、因幡國廳にて、饗を

三年春正月一日。於因幡國廳賜饗國郡

國の郡司等に賜へる宴の歌一首

司等之宴歌一首

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや

新年之始乃 波都波流能 家布敷流由

重け吉事 (卷第二十)

伎能 伊夜之家餘其騰

右の一首は、守大伴宿禰家持之を作る。

右一首守大伴宿禰家持作之。

後篇

一源實朝

正月一日よめる

今朝みれば山も霞て久方のあまの原より春は來にけり

春のはじめの歌

うちなびき春さりくればひさぎおふるかた山かげに鶯ぞなく

故郷立春

朝霞たてるを見ればみづのえの吉野の宮に春は來にけり

雨中柳

水たまる池のつつみのさし柳この春雨に萌出にけり

一源實朝

款冬をよめる

玉もかる井での川風吹にけりみなわにかぶ款冬の花

夏のはじめ

春過ぎていくかもあらねど我宿の池の藤なみうつろひにけり

郭公

郭公さけどもあかず立花の花ちる里のさみだれのころ

蟬のなくを聞きて

・風は―風の(定家所傳本)

吹風は涼しくもあるかおのづから山のせみ鳴て秋は來にけり

月前雁

天の原ふりさけみればます鏡きよき月夜に雁なきわたる

初冬歌の中に

よしの川もみぢ葉ながる瀧の上のみふねの山に嵐ふくらし

霜

難波がたあしの葉しろくおく霜のさえたるよはにたづぞ鳴くなる

霰

・ふきぬ―ぞ吹く(類從本)

もののふのやなみつくるふこての上に霰たばしるなすのしの原  
笹の葉に霰さやぎてみ山べの嶺の木がらししきりてふきぬ

・此うら―このうみ(定家所傳本)

箱根の山をうち出て見ればなみのよる小島  
あり。供のものに此うらの名はしるやとた  
づねしかば伊豆のうみとなん申と答侍りし  
を聞きて

・わが―われ(定家所傳本)

箱根路をわがこえくれば伊豆の海やおきの小島に波のよるみゆ

又のとし二所へまゐりたりし時はこねのみ  
づ海を見てよみ侍る歌

玉くしげ箱根の海はけけれあれやふた山にかけて中にたゆたふ

・海は—みうみ  
(定家所傳本)  
・山に—く—to  
(定家所傳本)

舟

世中はつねにもがもななきさこぐあまのを舟のつなでかなしも

あら磯に浪のよるを見てよめる

おほ海のいそもとゞろによする波われてくだけてさけてちるかも

山々にすみやくを見侍りて

すみをやく人の心もあはれなりさてもこの世をすぐるならひは

歳暮

・みどり子の—み  
どり子と(定家  
所傳本)

ちぶさすふまだいとけなきみどり子のともになきぬる年のくれかな

道のはとりに幼き童の母を尋ねていたく泣

くをそのあたりの人に尋ねしかば父母なん

身まかりにしと答へ侍りしを聞きて

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる

慈悲の心を

・かな—かなや  
(定家所傳本)

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかな親の子を思ふ

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎きせん事を

思ひて一人奉向本尊聊致念と云

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王あめやめたまへ

走湯山參詣の時

一 源 實 朝

伊豆の國や山の南に出づる湯のはやきは神のしるしなりけり

神祇歌中に

八百萬よもの神たちあつまれり高まの原にちぎたかくして  
男山神にぞぬさを手向つる八百萬代もきみがまに

太上天皇御書下預時歌

・ちよはーちち  
わく(定家所傳  
本)

おほ君の勅をかしこみちよはに心はわくとも人にいはめやも  
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

○「ひむがしの」の  
歌までは金槐集  
(貞享版本)に據  
る。

ひむがしの國にわがをれば朝日さすはこやの山のかげとなりなき

○「天の下」の歌、  
夫木抄に據る。

天の下八隅のなかに一人ます島の大君よろづ代までに

建保元年十一月

廿三日己丑、天晴。京極侍從玉體定家卿獻相傳私本萬葉集一部於將軍家。是以  
二條中將雅經、依被尋也。就之、去七日、羽林請取送進。今日到著之間、廣元

朝臣持參御所、御賞霽無他、重寶何物過之乎由、有仰云々。(吾妻鏡卷廿一抄)

鎌倉右大臣家集のはじめにしるせる詞

賀茂真淵

・あらぶる一四字  
を一本によつて  
補ふ。

いにしへよりうつろひ來にし世とのありさまを見るべきものは歌なり。いにし  
への天皇、ことある時は、大御手に弓とりしはり、大御そびらにゆきかきおぼして  
いかくをよしき御いつをもて、ちはやぶるあらぶる人をまつろへたまひしひすを  
しへず見なほしきよなほしたまひつゝ、天地のまにをさめましよかば、人々さ  
は天のごと天皇をたふとみつちのごとわが世よをたひらかたふれば、おのを  
をしくなほき心をぞもたりける。しかあれば青によし奈良の宮まではよめる歌  
もいにしへの心をつたへて、ますらはをとこさびしてをしくたけくたをやめ  
はさすがにをみなさびするものから、猶なほくつよき心をうしなはずなんありけ  
る。そが後の大みや所となりにては、くにつちやふさはしからざりけむ。いかき  
みちをしおこなはせたまはざりければ、ます人のとも、ひたぶるに上をかしこみた  
らず、かれにまひしこれにねぢけてますらたけをのあらたまをうしなひけるより、  
やつかひげおひたるをとこぬえくさのをみなに似たらんことをおもひをみな  
はいよゝたわやぎつゝ、うはべ花やかに下の心はかたましくなんなり來にける。

かくて世の中くだちにくだちおとろへにおとろへては人のこゝろもよめる歌もたにくくのさわたるがせばくうつゆふのこもれるがいぶせき如くにして打きくにもくるしくなんなり來にける。かゝりければかしこき御いつもつひにおとろへまして世の中久しくみだれにしを百よろづのたけをともし鳥が鳴あづまよりいでゝたひらげしつめ奉りしよりこなたさがみのやかまくらの城にして古の大御代おほゆるいかくをゝしき手ぶりにかへして大まつろへごと申しし時此大まうち君のよみでたまへる歌こそ奥山の谷の岩垣ふみはらゝかしいでゝ大空にかける龍の如くいきほひありておほのらや草木もゝろむけ八重たつ雲霧を拂ふ風の如くひたぶるにしていかくをゝしくみやびたるいにしへのすがたにかへりたまへりけれ。今此事をおもへばいかくなほからぬはいにしへの神すべらぎの道にあらずをゝしくみやびたらぬはますらをの歌ならぬことをさだかにぞおもひしりにける。

そのふたつ

ある人此大まうち君の歌は定家のまうち君にならひたまへりといへどそは難波津を手ならふほどのみにしていふにもたらず。後に心を得たまひつるにいたりては今の都と下れるすがたならぬばかの朝恒貫之といふも師にたちあへんかは。

ふるき詞を用ひられたるさま古今集の中にもよみ人しらすえぬ古き歌なるはにつけるもいさゝけはあり。寛平延喜の比の詞をたまゝとられたるはふさはしからぬぞおほき。しかれば藤原奈良の宮のはじめつかたにこそ師といふべき人はあらめ。さて定家の卿のしるしたまへるものに鎌倉の右府はたけたる歌よみとぞおほゆる。此歌を見る時は歌はものうくなりぬとぞあなるはさすがに此卿こそたまひたれ。しからばこれにおもむきたまひなんをいと老たまひて日なきなるべし。さて新勅撰にあまた入れられたる其歌のたかきしらべをゝしき心を後の人はいかでおもはざりけん。せばき箱の内に在てしかも後の世のをみなめく歌をいひならへる人天地の大かたみの中なるますらを歌を見てはとみに心のゆかぬにやあらん。

そのみつ

今傳はれる萬葉集の中に古えらばれけんは只初一つ二つの巻のみにして三つの巻より下は家々の集どもなればそが中にはいとよき歌いとわるき歌よき調わるき調も有を後の人は唯一わたりにのみおもふらん。此公は其よきあしきをわきて詞もとるべきをとりしらべもならふべきをならひたまへり。

そのよつ

此公の集の歌は、初なる中なる末なる有と見ゆ。其初なるには、くだれる世のあかづけるあり、中比なるしも、ひとわたりさることよきこゆるのみにて、なほたけたらず。かれこの二つは、すべてとらず。たゞ末にいたりて、げがれたる物皆はらひすて、清き瀬にみそぎしたらん心ちするには、しるしをつけたり。およそ後の人は、一くさのふし有たくみあるにのみ心をよせて、古の心高き歌をしる事なし。いかにも一ふしいふべきところを、わざとふしを捨て、たゞにいひながされたるなど、にるものなくたかし。又一つのたくみもふしも無くて、つゞけなされたる詞どもの調の世にたぐひなきなどもおほし。此を見しらん事、萬葉よく知りたらん人ぞ知べき。

そのいつゝ

萬葉を後に讀誤れるまゝにとりたまへるものは有。古の心は得られにたれど、其比古言を知りたる人しなれば、え正しあへざりけるまゝ也。假字も古にたがへる事あるは、たゞす人なき世のまゝなり。しかはあれど、かゝるやむごとなき人は、さることをつゞさにつとむるものにあらず。さぶらふ人に其人なかりけるこそをしかりけれ。

○賀茂翁家集(嘉永四年版本)に據る。

二 契 沖

師年十七、始詠倭歌。難波隱士下河邊氏長流、於歌什一見嘆其天授也。因結方外交。嘗曰、予之於契沖倭歌、所謂古今一鐘期也。冠歲受南山東室快賢密灌。及賢之遷住補陀落、又從得阿闍梨位、時年二十四矣。爲人清介安貧甘素。遇他信施如負荊棘。且厭幻軀如視蛇聚。室生山南、有一巖窟。師愛其幽絕、以爲堪棄形骸。乃以首觸石、腦血塗地。無由命終。不得已而去。元祿九年、爲人講萬葉集於圓珠庵。(錄契沖師遺事抄)

○契沖全集第九卷に據る。

吾水戸侯源義公、方恨萬葉集世無善註、而其詞義甚不明、慨然有爲之志。聞師才名、欲召託其事。師雖固辭不就、而竊喜於公盛舉。遂作萬葉伏匠記二十卷、總釋二卷上之。如第一所載、雄略帝御製、籠字、舊不知其訓。師授神代紀無目籠、訓加太麻、謂筐也。夫雄略去神代未遠、則師所訓實得其旨。義公見之嘉其卓見、且奇其合素意、賜白金一千兩、絹三十匹、勢焉。師不以自奉、充治寺費。

萬葉の講談

去ル九日之御狀十日落手忝拜見殊所望之松二本被下御禮難申謝候。海邊之松者付不申物故平野山と申所ニ而御掘被下候由時分も大躰能臺を被入御念不損様ニ而被下候上ハ決定千歳之庭實ニ罷成候はんと嬉敷立出々々貪着申事御座候。山松故瘦細リて長高ク誠隱逸之具ニ御座候。小松さへ二本被副候を乍淺茅植候而人不知悦申事御座候。御歌五首何も作意面白承候中

○歌の右側の小字  
は契沖の添削と  
思はる。

移し植て庵さいほりの外面じはの松風かぜに  
千年も法の聲こゑは絶たませし

此愚酬

いつみよりうつせる松の風しあれば  
法の聲さへちよも絶せし

又平野といふ山ニ而御掘被下候由當所鎮守仁徳天皇京都平野此御事と申

説・付簡

こゝにます神やうけなん所しも

平野山より松をうつせは

又不似合物之様可思召候へ共如見老へ被仰傳候而以前貝ノ餘殘候はゞ少少可被懸御意歎之由御窺可被下候。又此比万葉講談之様なる事催被申沙汰有之候故拙僧存候は貴様は伶俐ニ御入一聞二三ニも可及存候。拙僧萬葉發明は彼集出來以後之一人と存候。且其證古書ニ見え申候。水戸侯御家禮衆之中ニも左様ニ被存方御座候。煙消も火を不寄候時は不成功候様ニ少分は因縁を借候て早々成大事習目前之事ニ御座候。あはれ御用事等何とぞ他へ御たのみ候而御聽聞候へかしと存事候。世事は俗中之俗加様之義は俗中之眞ニ御座候。一邊鬪キ申程ニ無之候へバ勝レタル事ハ難成物御座候。貴様御傳置候へバ泉州歌學不絶地と成可申も知レ申まじく候。必何とぞ可被思召立候。知らせ候はゞ被悦可申方少々愚意ニ覺候へ共此方より何とぞと存候は不過二三候。齒落口窄り以前さへ不辯舌之上他根よりも別而舌根不自由ニ成難義候へ共さるにても閉口候はゞ彌獨り生れ

て獨死候身ニ同じかるべき故被企候はゞ堅ク辭退は不仕候はんと存候。來月當地へ御越可被成之由千萬期面候。恐惶謹言

圓珠庵

(契沖花押)

九月十三日

石橋新右衛門様

◎九月十三日一元  
除八年  
◎契沖全集第八卷  
に據る。

言靈

此集第五好去好來歌云。神代ヨリ云傳ケラク虛見津倭ノ國ハ皇神ノイツクシキ國言靈ノサキハフ國ト語り繼云ヒツガヒケリ。今ノ世ノ人モコトム、目ノ前ニ見マシ知マス云々。第十三歌云志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在與具。實ニ天神モ太諱辭ヲナシ給ヒ延喜式ニモ様々ノ祝詞アリ。此國ハ殊ニ言ヲ貴ブコト知ラレタリ。況ヤ此集ノ歌ハ多ク神語ヲ存シタレバ祝詞ノ流トスベシ。

(精撰本 萬葉代匠記惣釋 抄)

萬葉集の點者註釋者

此集ノ根本ノ點ハ天曆ノ帝ノ勅ニ依テ梨壺ノ五人是ヲ奉ハレリ。順家集云。天

の萬葉集注釋(卷十)に、トシハジメテト、セアマリヨツデアマリニイタルマデ、アハセテミソデガアヒダヒゴトニ(中略)住吉、天津島ノ明神、北野天神、山師、外ノ歌仙靈等ニ祈請フイダシテ、我今マシ生フアキツシガハクハヤマトコトノハノミナモトヲサトラシメ、コトノ事ニツイテ無師自然ノ智慧ヲアベリキ。ソノシルシヤアリケム、三十一一年ニアタリテ萬葉集本々披見トオホカリキ。ウツチオホカリキ。ウツチ十四日、萬葉集中、諸本無點、長短、旋頭、合百五十二首、抄出シテ、加推點、已畢、其後、萬葉集本々披見、因緣、本々披見、此集中、編作ノ詞、トイヒ、歌ノ詞、モシハ、落字、モダサル、ハ、モノ也。

曆五年宣旨アリテ初テヤマト歌撰ブ所ヲ梨壺ニオカセ給ヒテ古萬葉集ヨミトキ撰バシメ給フナリ。召ヲカフルハ河内、椽清原、元輔、近江、椽紀、時文、讃岐、椽大中臣、能宣、學生源、順、御書所、預坂上、望城ナリ云々。又云。抑順梨壺ニハ奈良ノ都ノフル歌ヨミトキエラビ奉リシ時ニハ云々。カ、レバ此時ノ點ハヨカルベキヲ其後失ケルニヤ。仙覺抄ニ古點トテ出シテ字點相叶ハザルヲ改ラレタル處多シ。誠ニ古點ニ不審ナル事多シ。今流布スル本ノ點ハ、仙覺諸家ノ名本ヲ集テ度々校合シ新點ヲモ加ヘラレテ其功スクナカラズ。然レドモ仙覺ノ點ニモ亦不審ナキニアラズ。各其處ニ沙汰スルガ如シ。

此集ヲ注スルハ八雲御抄云。萬葉集抄五卷抄、實之撰云々。此後仙覺律師一部ニ亘テ抄セラル。八雲御抄ニ五卷抄ト注セサセ給ヘルヲバ袋草子ニハ彼序ヲ引ニ不知作者ト云ヘリ。奥義抄ナドニモ序ヲノミ引テ其外引タル事ナケレバ本ハ早クヨリ失テ序ノミ殘タル歟。二十卷抄ト注セサセ給ヘルハ顯昭ノ袖中抄等ニマレマレ引カレタル萬葉抄ト有本歟。其義ヲ見ルニハカト、シキ物トハオボエズ。仙覺抄ハ簡略ナル上オボツカナキ事ノミアル物ナリ。此外ハ奥義抄袖中抄ナドニ、此集ノ中ノ歌ヲ拔出シテ注シタル類ハアレド、一部ニ亘テ注シタル人ハナキニヤ。(精撰本 萬葉代匠記惣釋 抄)

三賀茂真淵

萬葉考のはじめにしるせる詞

ひと

いはまくもあなにたふとき、天つ皇神祖の大御よざしのまにまに、かけまくもあやにかしこき、すめらみことの天つ日嗣しろしをすなる遠御代のごことは、石上ふるき御代つぎのふみらにしるされたり。しかはあれどもそれはしも空かぞふおほよそはしらべて、いひつたへにし古言も風の音のごととほく、とりをさめましけむこゝろも日なぐもりおぼつかなくなんある。かれ後の世に此ことをいふに、おのがじしおのがかたさまの心もてあげつらふなるべし。こゝにふるき世の歌ちふものこそふるきよゝの人の心詞なれ。此歌古事記日本紀らに二百ばかり、萬葉集に四千餘の數なむ有を、言はみやびにたる古こと、心はなほき一つごゝろのみになんありける。かれま

づ此よろづのこと葉にまじりて年月をわたり、おのがよみづることのはも心も、かの中にもよろしきに似まくほりつゝ、現身の世の暇あるときは、且見かつよみつゝ、このなかに遊ばひをるほどに、いにしへのこゝろことばのおのづからわが心にそみ口にもいひならひぬめり。いでや千いほ代にもかはらぬ天地には生まれ生る人、いにしへの事とても心ことばの外やはある。しかいにしへをおのが心言ことばにならはし得たらんとき、身こそ後の世にあれ、心ことばゝ上つ代にかへらざらめや。世の中に生いきとしいけるものこゝろも聲もすべていにしへ今ちふことなきを、人こそならはしにつけさかしらによりて、異ことさまになれる物なれば、立かへらむこと何かかたからん。かくしつゝかの二書ふたふみにあなる歌をもよく見よく解とけて後、立かへり君が御代御代のふみの八十くまもおちす、神の御代のごとをもさかのぼらひ見とほらふには、おのれしやがて其世ゝに在て見聞なしてん。しかありて上つ代のすめらみこと内には皇神を崇み賜ひ、外には嚴いき大御稜威おほみりつをふりおこしまして、まつろはぬ國をたひらげ、ちはやぶる人をやはしまし、天つちに合あひてとほしろき道をなし給ひ治めたまひ、うつゆふのさきことをば見し直しき

こしなほしおはしましゝかばあを人ぐさも皇神をゐやまひて心にきたな  
 きくまをおかずすべらぎをかしこみて身にをかせる罪もなく、まして臣た  
 ちは海ゆかば水漬かばね、山ゆかば草むす屍大君のへにこそ死なぬのどに  
 はあらしと言だてゝをゝしき真ごゝろをもてつかへまつればあがすめら  
 ぎの御をす國を、天と長くつちと平らけく聞しをせるゆゑよしをもつばら  
 に思ひ得つべし。こを思ふに、すめらみくにの上つ代のことをしりとほら  
 ふわざは、ふるき世の歌をしるよりさきなるものはなかりけり。かゝるを  
 おのれが若かりける程、萬葉は只ふるき歌ぞとのみおもひ、古うたもていに  
 しへのこゝろをしりなんことゝしもおもひたらす、古今歌集或は物がたり  
 ぶみらをときしるさん事をわざとせしに、今しもかへり見れば、其歌もふみ  
 も世くだちてたをやめのをとめさびたることこそあれ、ますらをのをとこ  
 さびせるし、こもしてみさかりなりしいにしへのいかし御代にかなはずな  
 むある。このことを知たらはしてより、たゞ萬葉こそあれとおもひ、麻もさ  
綿もあまたの夏冬をたちかへつゝ、百たらすむそぢのよはひにしてときし  
 るしぬ。いにしへの世の歌は人の真ごゝろ也。後のよの歌は人のしわざ

也。此業と成にてしよりこなたの人いにしへのうたもしかのみとおもふ  
 ゆゑに、古の御世の有さまを歌もて知ものともおもひたらすや有らん。

ふ た つ

上つおほみ代には、天つかみろぎの道のまに／＼すめらみこといかくをゝ  
 しきをうへと給ひ、おみたちは武く直きを専らとして治め賜ひつかへま  
 つりけるを、中つ代よりことさやぐ國人のつくれるこまかなるまつりごと  
 を多くとりとなへ、おみたちもふみのつかさつはものゝつかさとわかち、  
 ふみを貴くつはものをいやしとせしよりぞ、あがすめ神の道おとるへて人  
 の心ひたぶるならすなりにたる。しかりてよりこなた、すべての世の手ぶ  
 りもいにしへをはなれ、そびらにちのりのゆぎはおへども、をゝしき心をわ  
 すれ、おもてにやつか髭はおひながら、た弱きことのはをうたふ事となり  
 しは、ふさはしからぬわざならずや。かれそのこゝろ詞にならばへる人、上  
 つ世の手ぶりをきゝ、ふりにし歌をとなふるときは、おぞましくことなる事  
 とおもへりけり。そもく天照すひるめの命は、ひめがみにおはしませど、  
 ことゝあるをりは大御身に観かきおぼし、大御手に弓とりしばりまして、ま

すらをのをたけびをなし給ひ、御孫の命のあもりますときは、い建き神たち  
 をえらみまして、ちはやぶる百千の神をことむけ、神やまといはれ彦の天皇  
 は、たけき御軍もてはつ國しらし、その大御つぎのすめらみこと日つ  
 ぎのみこの命とまをすも、此道をうけつがして、もろくのおみたちはいよ  
 よそのみちにならひて、をしく大らかにまつりごちぬれば、上が上より下  
 がしもまでころろひとしくうちなびきぬるからに、みやこ人ひな人のよめ  
 る歌も、いかでをしくなほくあらざらん。その歌よろづにつけていへど、  
 すべて真心のまにいひ出つ、隠さふ隈なかりき。たみの心うらうへし  
 あらねば、よしやあしやさやかなるからに、罪なひたまひをさめたまふもた  
 はやすくして、大御世はいやさかえに榮ませりけり。これぞ此皇神のひろ  
 きおほみをしへにして、千五百代を傳へますも、神すべらぎの御たまのふゆ  
 にしも有ける。うへはうるはしびたるをしへごとをいひて、下にきたなき  
 こゝろをかくせるはから國人なり。すめらみかどの人はもとよりよろづ  
 のよき心を生れ得る國にしあれば、こまかなるをしへは中く、にそこなふ  
 わざにや。このころをよしくしらんにも、萬葉を見るにしく物ぞなき。

みつ

此定一本には  
 「此意」とあり。

いにしへの人の歌はまうけてよます、事につきて思ふ心をいひ出しなれば、  
 ひでたるありと、のほれらむをとりえらみつべし。いまかたとしてまねばんには、心も言葉  
 もしらべもと、のほれらむをとりえらみつべし。みは短歌のこと也。長歌は言  
 も調も別に、短歌によるしからぬが、却て長歌によきもあり、後世の長歌のあしきは、此定  
 を忘れたる故なり。から歌も此分ち専らなり。かゝる事は、いづこもひとしかりけり。又  
 わろしとするにも、本はめでたく末わろきあり。そをば其もとによるべし、  
 末をとることなけれ。心のまに、いへりければ、末にいたりてことばを  
 いとひあへざりけるものなり。かくしつゝあらたまのとし月にこの歌を  
 見ならへる。人後の歌をかへり見などして、はじめていにしへにおもむくこ  
 ころだましひになりぬといふなり。一たび二たびら見てまだしき心もて  
 ことをかざることなけれ。凡いにしへの歌は、ふつゝかなる如くにしてよ  
 く見ればみやびたり。後の歌は、ゆたかなる如くにしてよく見れば、くるし  
 げなり。いにしへの歌は、はかなきごとくにしてよく見れば、真こと也。後  
 の歌は、ことわり有如くにしてよく見れば、そら言なり。いにしへの歌は、た  
 だことの如くにしてよく見れば、心高きなり。後の歌は、巧みあるごとくに

してよく見れば心淺ら也。うたちふ物は、さきがごとくにしてひろく、ものよわらに聞えて強し。かれよく知ときは此御國のいにしへにとほり、天の下の心をも思ひたらはされ、傳へきく他の國のふみらの、あるはまことあるはそらごとをもわき、かたきをもはゞからず、あやふきにもおそれぬ心すらそなはりてまし。歌はたはれごとぞ、わはから國の大きなまつろへごとを得つるよといふ人あり。それが本とせるふみどもはしも、かたへの人かからば世の中治りなんとおしはかりに書しものにぞある。そを見知は何のかたきわざぞ。天つちのまゝなるこゝろのそこひをいひ出るわざを得てこそ、ちゞのこともよろしくゆきわたらめ。ふみのあとをおひていふものは、ことと有時かたくなにして、世に通らふ事なきものぞ。

よつ

いとしも上つ代々の歌は、人の眞ごゝろのかぎりにして、そのさま和くもかたくも強くも悲くも、四の時なす立かへりつゝ、前しりへ定めいひがたし。やゝ中つ代にうつろひて、高市岡本の宮の御時の比よりをいはゞみ冬つき春さり來て雪氷のとけゆくがごとし。これをはじめのうつろひといはん。

藤原の宮となりては大海の原にけしきある島どものうかべらんさまして、おもしろいきほひぞ出きたる。これぞ二たびのうつろひなりける。奈良の宮の初めには、此いきほひあるをまねびうつせしまゝに、おのがものともなくうらせばくなりぬ。これぞ三たびのうつろひなりける。その宮のなかつ比には、ゆかしき隈もなき海山を風はやき日に見んがごとあらびたるすがたとなりぬ。是ぞ四度のうつろひなりける。それより後の歌は此集にはのらす。古今歌集に、よみ人しらすとふ中の古きしらべなるぞ此宮の末より今の都のはじめの歌なりける。そは彼あらびたりしがうらうへになりて、清らなる庭に山吹の咲とを、めらむなして、ひたぶるに妹に似るすがたとなりたり。これぞいつたびの終のかはりめなりける。しかしてまた其世々の中にも猶いにしへなる、其世なる、古いまをかねたる、くさぐさあり。こゝに此集に載るが中のひとゝのすがたをわかちいはんに、ふるき御世なるはおして、やなにはの宮の皇后、こもりくの初瀬の宮の天皇、かづらきの豊浦の宮の日嗣皇子、高市岡本の宮の天皇おはしませど、あげつろはむは恐し。よみ人しられぬに、おきそ山三野の山、眞そみ鏡にあきつひれ

負なめ持て、わをしぬばする息長のをちの小菅などの類ひ數あり。こはす  
 でにいへるいにしへの實にしてあはれなるもの也。是より下にひでたる  
 歌といへどくらぶべくもあらず聞ゆるは、古ぬる世こそむかしかりけれ。  
 かくて後、大津のみこのゆたけきすがた、大伯のひめみこのあはれなるしら  
 べなど、歌ちふものゝしらべはかくぞありなましとおぼゆ。志貴皇子は靜  
 にしてこまやかに厚見のおほきみはにぎびてなほし。高市、遠黒人は厚ら  
 かにして面白し。名細きよし野の山を花によらで見るが如し。ながきが  
 めでたかりけむを、是ぞそれとしられぬにやあらん。柿本朝臣人麿はいに  
 しへならず後ならず一人のすがたにして、荒魂和魂いたらぬくまなんなき。  
 そのなが歌、いきほひは雲風にのりてみ空行龍のごとく、言は大海の原に八  
 百潮のわくが如し。短うたのしらべは葛城のそつ彦真弓を引ならさんな  
 せり。ふかき悲しみをいふときはちはやぶるものをも歎しむべし。山上  
 臣憶良はことばふつゝかにして心うつくし。久米のとも雄ふしきすが  
 たしてたつゝ舞せらんおもほゆ。短うたの中にたゞ言にいへるはいふべ  
 くもなし。山部宿禰赤人は人萬侶とらうへなり。長歌は心もことばも

たゞに清らをつくせり。短うたこそこれも一人のすがたなれ。巧をなき  
 すあるがまに、いひたるが妙なる歌となりにしは本の心の高きがいた  
 りなり。たとへば檳榔の車して大路をわたるぬしのあから目もせぬがご  
 とし。大伴宿禰旅人のまへつぎみの短歌はをしくてかなし。酒をよめ  
 るにすめら御國のこゝろをいへるはたふとし。こはしらべをすてゝ心を  
 ぞとるべき。長きはしらす。それが繼なる家持のぬしは事をよくしるし  
 てにほひなし。たとへばいでましの大みともものつら<sup>行</sup>をめでたく記せるふ  
 みのごとし。短歌はいと多かれどあらびてうらぐはしきはまれになんあ  
 る。これよりさきに三方の沙彌、久米の禪師が古きすがたのうるはしき、又  
 長の忌寸意寸まろ、春日くらのおほと老が心しらび、その外にもこれかれあ  
 れどこゝにつくさず。田邊史さちまろ、笠朝臣金村、高橋連蟲萬呂などは、い  
 たづらにいにしへをいひうつせしものなれば、強がごとくにして下よわし。  
 をみなにては額田姫王はいにしへのみやび人なり。春秋のあらそひを判  
 給へりしなんをみなごゝろのをかしき。大伯皇女の御歌は事にふれて上  
 にいひつ。石川郎女がなよびたるすがた、譽謝姫王のよろしきしらべ、大伴

坂上郎女の歌は氏の手ぶりのしるく、事にもあたりぬべきさま也。また歌ぬししられぬにこそ猶おほけれ。藤原の宮づくりにたてる民が歌はおぼろげにあらず。同じ御井の歌のふることを和しいひてあやあるは、其代の黒人人萬呂の外にすぐれにたり。すべて短歌にひでたるさはなれど擧るにたへんやは。

○賀茂翁家集（嘉永四年版本）に據る。

萬葉を讀んには

萬葉を讀んには今の點本を以て意をば求めずして五行よむべし。其時大既訓例も語例も前後に相照されておのづから覺ゆべし。さて後に意を大かたに吟味する事一行して、其後活本に今本を以て字の異を傍書し置て無點にて讀べし。初はいと心得がたく、又はおもひの外に先訓を思ひ出られてよまるゝ事有べし。極めてよまれぬ所くをば、又點本を見るべし。實によくよみけりとおもはるゝも其時に多かるべし。かくする事數篇に及で後古事記以下和名抄までの古書を何となく見るべし。其古事記日本紀或は式の祝詞、部代々の宣命の文などを見て、又萬葉の無點本を取て見ば、獨大半明らかなるべし。それにつきては今の訓點かくは

有まじきか、又はいとよく訓せし、又は決て誤れりといふ事を、知且文字の誤、初字脱字ならんといふ事をも疑出來べし。疑ありとも意におもひ得んとすれば、また僻事出來るなり。千萬の疑を心に記し置時は、書は勿論今時の諸國の方言俗語までも見る度聞ごとしに得る事あり。さて後ぞ案をめぐらすにおもひの外に所に定説を得るものなり。然る時は點本はかつて見んもうるさくなるべし。其心を得る人も傍訓にめうつりして心づくべき所もよみ過さるゝ故に、後には訓あるは害なり。（萬葉解通釋并釋例 卷）

## 四鹿持雅澄

## 萬葉集と古學

萬葉集をよくよみあぢはひて、一には皇神の道義をあきらめ、一には言靈の風雅をしたへと常にいふは、ことに所見ありていふことなれば、今くはしくわきまへむ。そもく皇神の道の尊きことをば、一日一夜もわするゝ間なく、あふぎ尊み敬ひまつるべき理なるに、既に寧樂人も華夷の分をとりうしなひて、戎國をさして大唐とさへいへることのあるは、かの國に諂ふとはなけれど、おのづから外國の道に溺れ惑ひて、心の附ざりしものなり。しかれば寧樂朝の頃はひたぶるに人の意も事も、外國さまにしみつきたることにて、今よろづをこれになすらふるときは、歌の風體のみのことならばこそあれ、道にとりてはかの頃は、さのみしたふにたらぬことわりならむともいふべけれども、其は見る人の心にあることにて、精く擇て、あしきをすて、よ

きをとらば何であことかあらむ。ことく書に信がはゞ、書なきにしもしかずと、漢人もいひたるにあらずや。かくまで外國の教ども、いやはびこりにはびこりたる世中なるに、なほ神代のみてぶりは、もろくの神事と歌詞には、正しく傳はり來れりしなり。かけまくもかしこけれども、神御祖天照大御神、大御手に大御鏡をさゝげもたして、皇御孫尊にみことおほせてたまへりつらくは、この豊葦原の千五百秋の長五百秋の水穂國は、吾御子のしろしめさむ國なり。かれあもりいましてしろしめせ。高御座天の日嗣のさかえまさむこと、天壤のむた窮なかるべしと、ことよざしたまへりしまにまに、天地のよりあひのきはみときはにかきはに、皇御孫尊のをす國とさだまりて、神ながら四方の國を、安國と平けくしろしめし大まします、高ひかる日の大朝廷に、道はやくそなはりてあれば、たとひ時うつり事さるまにまに、からさまにまれほとけさまにまれ、なべてのふるまひはうつるふこともこそあれ、皇神の道は、八百萬千萬御代まで、たかみくら天の日嗣のうごくことなくかはることなく、神代も今も一日のごとく、天地にてりたらはしてしろしめしきぬるがゆゑに、かたじけなくも神事と歌詞には、神代のでぶり

のたがふことなく、あやまつことなく、遣れることなれば、皇神のいつくしき國、言靈のさきはふ國とはいへるぞかし。かれその言靈のさきはひによりてぞ、皇神のいつくしき道もつかゞはれける。されば皇神の道をうかゞふには、まづ言靈のさきはひによらずしては得あるまじく、言靈のさきはふ由縁をさとるべきは、この萬葉集こそ又なきものにはあれ。

さてその皇神の道は、言靈のさきはひによりてうかゞふべく、言靈の八十言靈は、寧樂人までの古事にとゞまりてあれば、此集を重みしてよみあちはふべく、そのよみあちはふるころばえは、上の件にいひたるごとく、既に其世は外國さまにうつろひぬとはいへども、うつろはぬがごとく、君臣の大義をつゆあやまつことなかりしなれば、この處にふかく心をとゞめて、大かたに心得すぐすべからぬことなり。さてこのたゞよはぬ心をもて見るときは、教のためとはなけれども、學び得つべきことすくなからずなむありける。大皇者神爾之座者とよめることもところへ多く見え、或は遠神吾大皇と申し、或は明津神吾太皇とも申し、或は吾大皇神命とも申し、或は天皇の爲

行はせ給ふことをば、いつも神在隨と申たるごとく、天皇尊は人倫とは、さきことに尊き神にましますものにしあれば、かの外國の首領のもと凡人なりしが、徳と業との世にすぐれたりしにより、天子とあふがれし類とは、かりにも同日のものがたりに爲むは、まことにゆゑしくかたじけなきことなりけり。又物部乃臣之壯士者、大主任乃隨意聞跡云物會、又皇之命良美といふことの常多かるなどを考へて、皇朝廷をかしこみまつりし、古の風儀をも思ふべく、又天雲之向伏國武士登所云人者皇祖神之御門爾外重爾立候内重爾仕奉玉葛彌遠長祖名文繼往物跡母父爾妻爾子等爾語而立西日從といへるは、天皇をかしこみまつりしのみならず、かの家持、卿の人子者祖名不絶とも、牟奈許等母於夜乃名多都奈ともよまれしごとく、子孫の八十連屬その家の祖先を重みしたることをも思ふべく、又孝謙天皇の虛見津山跡乃國波水上波地往如久船上波床座如大神乃鎮在國會と御製ませるにて、神祇をひとへにたのみし古の風俗など、あふぎてもなほあまりあり。かくて又近江、大津、朝よりは、くさく、世間の事業しげくなりぬるから、彼此につき議論せずてはあらぬことなるを、なほ物言むとては、葦原水穗國者神在隨事舉不爲國

雖然辭舉叙吾爲といひて、ことさらにそのことあげするよしをことわり、又志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在與具などいへるも、上古よりありこし風をつたへて、大津、朝藤原、朝の人のよめるなるをも思見べし。さて又朝廷のため、天、下のためはいふもさらなり、事にふれて福をもとめ、禍をさけむがために、佛菩薩にむかひていのりごとすることは、はやくのときより、神祇にはまさりていみじかりしこと、國史にも往見見え、集中にもさる趣なること、山上、大夫などが作文にも見えたるを、歌詞にさる趣なるはをさく見えず。或は旅行の平安むことをいのり、或は夫婦の中らひのことをこひのみたることにいたるまで、ひとへに天神地神をふかくるやまひいつきまつりしこと、こゝかしこにあまた見え、又人の身の病にかゝりて惱むときに、良醫をたのみ餌薬を服しことは、其頃めづらしからぬことなるに、それらの趣も歌によめることなく、たゞ天神地神にこひのみしことのみよみたるは、大事より小事にいたるまで、何によらず神祇のみをたのみまつりて、るやまひまつりいつきまつりし、上古の風儀をつたへて、歌詞にはよみきたりしがゆゑに、或は佛にいのり僧にかたらひ、或は醫人にたよりて病を除しなど、すべて上

代にもはら行なはれざりしことをば、もはら行はるゝ世となりても、よろづ神神しく、古めかしからずふさはしからざることゝして、かりにもよまさりしからに、上古のてぶりの、もろくの神事と歌詞にのこりたりと云るは、そのゆるなり。今、世とても田舎のかたほとりなどにては、病などに犯されたるには、薬よりはまづ神祇にいのることまさりたるは、なほ上古の遺風なるに、そをかへりてをぢなくつたなきことのやうに思ふめるは、中々にあさましきことなり。さて此、他にすべて陰陽乾坤の理などを、歌にいへることも中にはあるべきに、さる趣なるは一もまじはらず。たまくと天地毛縁而有許曾など云ることもあれど、それは柿本、朝臣の吉野にてよめる長歌に、山川神とよみて、その終にも反歌にも、神と云ことをことさらに省きて、山川毛因而奉流とよめるに同じく、天神地神と云ことを省きて、天地といへるにて、古語に證例あること本條になほいふべし。さればこれは異國人のいはゆる天地にはあらずと知べし。たまくと佛籍のいはゆる天堂、或は來世、又本性清淨の理などを思ひて、よめりと思はるゝ類もたえてなきにしもあらねど、其は阡陌にして、什一もあることまれなるうへ、たゞ一時の戲言にいひす

てたることもありと思はるれば、さる類は除てよまずとても事かくること  
 なく、またたゞ歌の風調のみをとりて意をだにうけがはずば、何の害にか  
 なるべき。其、餘からくにの原穀と云し人の故事、莊子が自然の理などをよ  
 めるもあれど、これも俳諧の類なれば、右にいへるに同意なり。柿本、朝臣山  
 部、宿禰などのにいたりては、かりにも外、國の故事などに、まぎらはしきこと  
 を一もいへることなく、みないともく、古き神代の故事のみによりてよめ  
 るは、たふときことにあらずや。さて又堯舜禪讓湯武放伐者、於吾道、殆、天淵  
 也とはやくの人も論ひたることにて、心ある人はその分差は思誤つことな  
 ければ、ことあたらしきことなれどなほいはむ。なみく、の世の儒者ども  
 こそ、堯舜の禪讓を又なくいみじきことにおもふことなれ。はやくもろこ  
 しにてもさかしだつ人は、堯が徳衰るにいたりて、舜これをとらへ、其、子をも  
 おしこめて、みづから帝位に登りたる物なりといひ、又舜禹がしわざも、實は  
 後、世の王莽曹操に、何か異りたることあらむなどもいへりしとぞ。しかれ  
 ども舜は當時こそ民間にしづみ居たるなれ、實は黃帝といひし人の八世の  
 孫とかいひ傳へしごとくならば、まぎれもなき王統なり。されば大かたの

世の人の意得來つるごとくに、禪を受て嗣たりしものにもせよ、又は莽操が  
 ごとく、實は奪ひて天、下をとりたるものにもせよ、其はいかにまれ、王統なり  
 とせばなほつみゆるさるゝ方もあらむ。さればはるけき末の代まで、天、下  
 の人に、朽せすうすらがすあふぎしたはるゝは、さはいへど、あはれ其、人のす  
 ぐれたりし大、徳とぞ云つべき。しかれどもから國にては、舜何人、也予何  
 人、也といひ、舜、人也我、亦人也などやうにいへるごとく、その人の胤、にも姓に  
 もかゝはらず、たゞその徳のすぐれたるとしからざるとのみの異にて、聖人  
 とあふがるゝと庶人にてあるとにこそあれ、才と徳を尊むことはさもある  
 べきを、系統をばつゆおもはざることよ。さはいへど、あだし國のならはし  
 こそ、げにたのもしげなくあさましきことなれ。されば後つひにはちりひ  
 ちのかずにもいれず、いやしめあなづりし者どもに、國を奪ひとられてもせ  
 むすべなく、かたさりをるよしは、もと其、系統によることにはあらず、舜も人  
 なり我も人なり、たゞその徳威こそいみじき物にはあるなれど、おちかしこ  
 まりてかゞまりをることなれば、なにかせむ。かゝればあだし國にては、  
 君臣上下分のみだりなることは、はやくよりその基をきざしたるにあら

すや。あなかしこく。吾天皇尊は、現神とも遠神とも申せるごとく、まことの神にしましませば、人倫とははるかに遠くすぐれましこく、て、千萬御代の御末まで、只一御代のごとく、稜威の尊く奇く靈く大座すことは他ならず、天津日、大御神の大御裔の御子、尊に大座すことなれば、徹しき外、國の王どもとは、かけてもひとしなみに論ふべきにあらず。さて又湯王が桀を征て國をとり、武王が紂を伐て天、下を得したぐひも、ゆづりをうけたるにこそあらね、その人のいたくすぐれたりし徳によりて、天命に配ひ天、下のためになりしこと、て、四方の人どもほめどよみて、末、世にいたるまでも、ありがたきためしにいひ傳へたるは、かの國の風俗にてはげにさこそあらめ、吾より見れば、いとけがらはし。まして其より後々はさらなり。さて又國の首領だにかくあれば、きのふまで賤山賤なりしものも、徳だにあれば、今日は俄にとりあげられて、高位にのぼりて國、政をとり行ひ、いみじくさかえおごりし類は、めづらしからぬを、吾皇朝は、はやく上古に、君臣と上、下との分かたく定りて、臣連八十件、緒にいたるまで、氏かばねを重みして、子孫の八十連屬、その家のわざをうけつがひつ、祖神たちに異ならず、只一世のごとくにして、

神代のまゝに皇朝廷に仕へ奉れるよりくらべ見れば、すべてかの國の高官なるものども、禽蟲の列といはむにも、何でふことあらじとこそおもはるれ。さて又もろこしにては、その國の首の領せるかぎりを中國と名け、みづからを天子と稱り、その餘何事もこれになすらへて、すべてきはことになれだけ、いかめしく、高ぶりをるに似ず、みづから寡人不穀など、謙下りていへるこそ、いぶかしと思ふに、天子となのりをるものも、もと人の國を得て位につきをる人なれば、しばしも徳と云ものを失ひて、天、下の人のなつくべくかまへざれば、たちまちかたへの人に、國をとられなむと思ふ心しらひより、さもなきことにも心をおきて、人に謙遜りへつらひて、眞の心をばあらはさず。それにつれて高官にのぼりをるものも、その種姓にはよらず、たゞ僥倖にて、微賤きものも、才と徳とによりて、とりあげられたるなれば、上よりもそねみ下よりもいきどほるときは、間もなくおひのけられ、身も亡びなむと思ふことの下おそろしさに、よろづ卑下り人の心をとりに、ものいふことをば常わすれぬより、おのづから風俗のごとくなれるものなるべし。しかれども、これはそのもと理のあることなれば、かの國にては、げにさもあるべきこ

と、こそ思はるゝことなるに、かしこきや吾皇天皇尊は、大御皇祖神たちの大御前をいつき祭りたまふにこそ、敬禮のかぎりを盡させ給ふことならぬ、其を除て誰しの人にかへつらはせたまはむ。何の國にかおもねらせたまはむ。しかるを書紀などに、天皇等の御自謙下りたまひて、朕不才豈敢宣揚徳業、などやうにのたまへりしこと、往往あれど、其はたゞ文辭のうへを、漢籍にならひて書たまへるのみのゆゑにこそあれ。實にさやうにはのたまはざりしこと、集中大御歌詞にて知べし。さばかり異國の道を信はせ給ひし、聖武天皇の節度使に御酒を賜へる大御歌にすら、手抱而我者將御在天皇朕宇頭乃御手以搔撫會禰宜賜打撫會禰宜賜云々とよませ給ひ、それより以往にはさるさまに詔へること多く見えたり。これことさらに臣下に皇威をかゞやかせ給はむために、御自宇頭乃御手など詔へるにはあらず。神代よりいやつぎ／＼に、天皇はかくさまにのたまふこと、さだまりたる常のことなるゆゑに、しかのたまへるにて、かのから國の首領どもまで、自謙下て寡人などいひたるとは、炭と雪とのかはりあることにて、ありがたきことにあらずや。もし何事もひたぶるに、外國さまをまねびたまへりしとならば、書

紀などの文辭のごとく、御自謙下りてのたまふべきことなるに、さもなきはすべて歌詞には神代のまゝをわたへて、外國意をばまじへざりしがゆゑなり。さてそれより臣民の列にいたるまで、すべてから人のごとく、へりくだりていへることのなきは、外國をまねぶといへども、まねばざることく、大きくさま異りたることなり。しかるを自をへりくだりていふことは、君子の體なりと心得、さもなきを無敬なりと思ふは、もとうはべのへつらひより事おこれるには心つかず、ひとへに外國意にしみつきたるがゆゑなり。

すたれりしもろ／＼の古のみち／＼も、たえたりし萬のふりにしわざ／＼も、つぎ／＼におこるめる中に、古こと學びのいやましにおこなはるゝことをおもふに、そのはじめは難波の契沖あざり、古き代の書を見あきらめて、すぐれたる書どもをみづからもかきあらはしたるを、そのかみ大かたの世にはしれる人もなかめりしを、水戸の殿のさときこしめして、代匠記をかゝしめ給ひたるなどを、ぞにひはり道とは云べき。それよりすぐれたる人もおひすがひに世に出て、いにしへをしたひ、いにしへぶりの歌よむ人もこれ

かれといできにつゝ、をちなきわれらまで、皇神の道のたふときすぢをさとり得たることは、ひとへにかのあざりのことさきだてゝ、世、人をいざなへるより、より／＼にすぐれびとたちの出来て、さとせるしをりをつぎとしてわけのぼるにこそあれ。しかるにいにしへをしたふ人々、さき／＼のすぐれ人先師シムベトなどのをしへによりて、さとりたりとはいはで、たれも／＼おのれひとりのこゝろよりおもひ得たることのやうにいひなし、かへりては前人の説をばもどきいふ人のおほかめるは、かたはらいたきことならずや。其はまけじだましひなる心のさかりなるより、うはべには前人をおとしめそしりて、したにはひそかにその説をよしとうべなひてまねぶこそ、そこぎたなくうらはづかしきことにはありけれ。それが中にも前人の論とおなじからぬやうにたくみて、しひて一ツの門をはりてものいはむとする人もあめれど、其はもと世にたけきものに思はせて、はやく人にしられほまれをとりて、時にほこらむとかまへたる事量コトバカリにて、まことのすぢには非ず、すべて志をたつることの高からず、きたなき心のきまならず、一時の名譽ホノレを欲オホふがゆゑに、さる類はあるものぞかし。但しから人も大く欲オホするは、欲オホせぬに似たり

○宮内省御藏版の  
萬葉集古義に據  
る。

といへることく、たゞひとへに名利ホノレを思はずと云のゝしるは、世にたけきものに思はせて、かへりて名利ホノレをねがふこゝろの深きものにて、あらはに名利ホノレをねがふよりは中々に心ぎたなし。されば丈夫は名をし立べしなど云て、古の人も名を立ることを思はざりしにはあらず。されど志の高くて天、下の鑿カク戒カクとなり、四方の人の模範カクとなるべくかまへたるがゆゑに、後、代にきゝつぐ人もかたりつぎて、祖先の名と共に斷タテざるなり。もし古の人のごとく、まことのすぢをのみ思ひおこしてまねばむには、つひに古の事もあきらかにしらるべきことなるに、さる人の世に乏しきは、志の高からず、學の力チカラのともしきがゆゑなり。(萬葉集古義 總論其三 古學抄)

をとこやもむなしかるべき

をとこやもむなしかるべきよろづよに、かたりつぐべき名はたてずして、といにしへの人はいへり。時にあひ花やかなる人も、思ひやりふかゝらずして、世にしるべきふしをなしおかすしては、たれかはなからむ後の世にかたりつぐべき。さればいかにさかしき人もすみやかにいさぎよき名をとらむとかまへて、あるまじ

と思ふすぢのことひたおもてにいさめあらそふときは大かたの世にそねまれ、人にうらみられてつひにはよきこといひても、人のしんせぬやうになりもてゆきて、そのいさをもたちがたきものなりかし。世の中よろづのことみなしかり。歌よむすべのことも、ふみにかきあらはしおきて、後のためとなるべくつとめたることをばのどやかに心しづめてとりみむ人の、はじめまのあたりきてもどかしく、心やましとおもひきゝもいれざりしことも、げにとうけひかるゝことのあるならひなり。おのれをちなけれど、このところに心つきてはやくより年久しく、よるひるの力をつくして、書をあらはすことをことゝせり。しかるに去年の冬、ゆくりなく妻にわかれしこと、かなしさはさるものにて、仕の道のいとまには、老たる父、をさなき子どもをやしなふこと、のみにかゝづらふ身となりぬるをもとより、家まづしく、ことをたすくるしもべだになければ、手づから菜つみ水くみなどして、月日をわたるに、いかでかふみ見筆とるいとまのあらむ。しかはあれども、かの古ことをおのがつねに誦しをりしを、ありし世に妻がきゝよろこびて、夏の日のおつさをし、のぎ冬の夜のさむきにもたへて、あしたゆふべのこととりまかなひつゝ、いさゝかもおのがわざのたゆみながらむことを、たすけなすゝめあへりし、そのおもやうの今も見るやうにおほゆれば、今はいとまなしとて、かきさしおきたるものを、なを

ありて、のちつひにしみのすみかとのみなしなば、人こそしらね、ありがよひつゝ見む魂の、いかに本意なく口をしきものに思はまし。いでおのが心のゆるびなきほどを、ありがよふたまも見よるこびてよと、それをせめての力にして、ほとゝきえぬ、かりし心を、又さらにもふるひおこして、よなか曉をいはず、いさゝかのいとまのひまゝに、この巻の下書よりとりいでて、かくまでとりすてかきくはへあらためなほしつるになむ。なほなにくれの巻とは、おひすがひにいたづき物せむを。

天保八年丁酉五月十三日夜

飛鳥井少將雅量朝臣八世孫

藤原雅澄識

(永言格跋)

遺しおくところの道

吾が常に學ぶところの道は、海内にわたるうへのことなれば、一國一郡の人にしられたりとて、いかでか其を榮とせむ。且急に行はるべきでだてにしもあらざれば、身の後三百年乃至五百年をも經む中には、世上の論定りて、吾が常に書き著し、遺しおくところの道の行はれむことなくて、はあらじ。其時にいたりて、わが神魂天翔りて、今こそ時至りに、けれと歌ひ舞ひよるこぶべし。

・川道遙「川に  
道遙」の意。

歌よまむと思はば、奈良以往の人々に交り居るころもちならでは、いかに志を高くもつといふともせむなかるべし。たとひ世に用ひられ、人にしられむことをこのむとも、婦人小兒にめでよろこばれて、なむぞ腹の居ることのあらむ。又おとしそしられても、なむぞ腹たつことのあらむ。これによりて某は常に、昨日は家持卿、憶良大夫などと、手を携へて山に登り、今日は金村、蟲万呂などと、臂を交へて川道遙し、又朝には藤原卿、橘卿等の前に出て物語を承り、夕べには柿本、山部の朝臣等の門に入て歌の添削を乞ふなどぞすなる。この心もちをしばしもはなれてはいかにか歌と云ばかりの歌をばよみ得べき。そのいとまには、かしこくも皇神のいつくしき道を尊信して、遂には其道の思ふままに行はれむ時をまちをる心も、ちなれば、いかでか身の貧しく賤しきをのみひたぶるになげきをるにいとまあらむ。

(山齋集 附録抄)

○山齋集「雅澄の  
歌文集」。

萬葉集古義刻本序

萬葉しふは吾が國古書の一にして、これをひもどけば、當時の人情風儀をしり、また事物の稱呼沿革等をもしるに足れり。しかれども、其詞づかひ文字の用るやうな

ど後世の人の辨へがたきこと甚多し。故に先達の學者これが註釋をつくり、これが論説をなして其書すでに數十部おのゝきはむる所ありて後進の益をなせり。近世土佐の學士鹿持雅澄萬葉集古義を著はせり。蒐輯ことにひろし。其勞おもふべし。この書註釋書中の上位におくべき書なり。わが明治聖上の爲にこれを奏する人あり。上命してこれを土佐にめさしむ。しかるにこの書もと雅澄が生涯の力をつくし世を去るに至まで校正してやまず。また卷帙甚多きがゆゑに正本に乏し。雅澄が門派高知縣士族福岡孝廉が藏本ひとり全本たるのみ。其他雅澄の嗣子飛鳥井雅慶の家に藏する所といへどもなほ完全ならず。これによりて福岡孝廉をして奉らしむるに至れり。孝廉ふかくこれをかしこみよるこび雅慶其他の門人等とはかりて更に校正淨書してつきく宮内省に出せり。本編百卷は福岡孝廉が奉れる所附録廿餘卷は飛鳥井雅慶の奉れる所なり。上すなはち宮内の官吏に勅してこれを刻本となさんとしたまふ。わが輩かねて文學懸りの命を奉ずるを以て其事にあづかれり。ことし明治十二年の夏その第一卷刻なれりと告ぐ。實に萬葉集註釋書中において殊に光榮ある一本世に出現せりといふべし。心あらん人はみな天意のかたじけなきをおもひ、また福岡飛鳥井の輩は師の爲父の爲かなしみよるこびこもくなるおもひをなすなるべし。今其刻本と

なしたるはかの福岡以下門人數名が校正して進献する所の原本にしたがひて加除添削をなさざるものなり。今かく其刻本となれることの上命によれるなり。あなかしこや。それが序文となす。この序文をそふるも上命によれるなり。あなかしこや。

明治十二年八月

元老院議官 福羽美静

宮内省中文學局にありてしるす。

五 佐久良東雄

現神わがおほきみはこの照らす日の大神のみことしらすや

大御京爾登時爾謠曰

顯身之	人等生出	明日不知	脆此身乎	二行奴	此年月雄	何有	許
登乎成而可	世爾生留	驗者有武	旦夕爾	勇萬志加良牟	土食而	飢	吾
者死共	畏也	今現二	天地二	以照徹良須	天照	日皇子	現神
大王二	無比	赤心乎	一筋爾	盡而社止	大丈夫之	精神振起之	劍
太刀	腰二帶乍	草枕	旅裝束爲而	知々能美之	父遠別連	波播曾葉	
之母	乎離禮	善	友雄毛置而	住馴之	里出立	日毎二	時雨零乍
之	草毛	木毛	色變去	金風二	白雲立而	雁之音之	響動頃之母
八峯踏越	和當豆三能	海遠王	太里而	大王之	御京二登流	如此及二	

後篇

思精神波 大王毛 知食禰等 天地之 神者知牟跡 權之氣久 我半叙

登留 皇我御京二

反歌

一步 步者步 度毎二 京幣近久 成之權左

一三八

磨劍

死變 生反乍 天地之 依相之極 現神 吾大王爾 一筋爾 仕奉牟  
事四有者 久奈多不禮等乎 切屠 命死牟止 村肝之 精神定而 劍太  
刀 磨而師在者 月夜毛 花朝母 阿波禮乃 殊爾有氣利 是會此 神  
代廻隨能 人乃真心

花の嵐に散るをみて

寒しあらばわが大君の大御爲人もかくこそちるべかりけれ

磨劍

事四阿良波 吾大王之 大御爲 命死奈武止 磨師劍曾

東雄牙喫建怒涕泣而謠

かりそめに木太刀とるにも大皇のおほみためにとおもへ大丈夫

幾千度 命死奴等毛 大皇能 大御爲二八 乎之可良那久耳

勤王

いのちだにをしからなくにをしむべきものあらめやはきみがためには  
きみがためいのちしぬべき心なき人のするわざはかなかりけり

一筋に君に仕へて永き世の人の鑑と人はなるべし

大王にまつろふことなるなき人はなにをたのしと生きてあるらん

後篇  
飯食止 箸乎取爾毛 吾王之 大御惠止 泪四流留

ちりひとつわがものはなき世の中に君のめぐみを忘れざらなむ

君に親耳安つ久都かふる人の子の寢覺半以何仁清九有良牟

月花乎 觀爾都氣而母 皇遠思比 祖乎偲布會 眞實宮風男

示人子歌

知々廼實乃 父眞名子會 波々會葉廼 母我愛兒會 明日不知 脆此身  
乎 土食而 飢者死共 穢也 大勅旨二背 奴等爾 媚諂而 東間毛  
命續也 言文・忌々志久 掛文 靈爾恐懼 高照 日皇子 吾大王爾  
一筋爾 仕奉而 天地之 依相之極 遠久長久 清名爲遺 人之其子者

天皇につかへまつれとわれを生みし吾がたらちねぞたふとかりける

頗良可羅乃 那加宇累半新久 愛禮登伊悲之 波波能許騰能八 都年耳  
和數留難

ある入東雄にきはめてあはれなる歌詠みて

賜はれとありければ翁言下に筆とりて

雪の夜にすてし赤子のなきやむは母の添乳の夢や見つらん

たぐひなき神の御國にうまれいでしかひあるひとゝなるよしもがな

幽冥をかしこみて

益荒雄之 東男子之 一筋二 思心者 神會知良武

天地の神も知らさぬものならばなにをいのちに生きて有らまむ  
ますく神習ひつゝおほかたの青人草にならばざらなむ

おきふしもねてもさめても思ひなば立てしこゝろのとほらざらめや

思事 等人騰 語相而 在計許衣 命也氣禮

天地のいかなる國のはてまでもたふときものは誠なりけり

讚楠族歌

死變 生反乍 大王之 大勅命爾 不仕奉 醜奴乎 切盡 仕奉止 劍  
太刀 磨師精神乎 巖如 堅固約束而 顯身之 命死有 楠之 宇加良  
族者 知食 百八十國之 武士之 人之鑑止 天地 日月與爾 語嗣  
言續行 宇加良族者

楠正成

天地のよりあひのきはみ武士のかぐみとなりし君がいさをは

東 雄 上

○明治天皇の御降誕に際し、中山忠能卿に奉りたる歌。

名爾高寸其中山之

姫松爾

天津日之影豊榮登留

天照日嗣皇子乃尊

曾止深思者泪二二

流留

遺 言 狀

我等先祖ヨリ

皇恩神恩何万年今日迄受候ヤ數ヘガクシ。此處ヲヨク々 勘ヒ明ムレバ、此一身

幾度すて、

御恩報じ候とも報じ難し。實ニ九牛ガ一毛ニモタラヌコト也。ヨクヨク此意ヲ

勸明ヌ、スハヤ

御大事ト申時ニハ、一命ヲステ、報ヒ奉ルベシ。然ラザレバ吾子孫ニアラズ。我

五 佐久良東雄

・報ヒ「報イ」の誤。  
・我父「我又」とも讀み得。

・與ミ振假名は原文のまま。以下同じ。

後篇

父然ル忠心候ハバ、幽冥ヨリ助ケ大功ヲ成サシムベシ。若然ラズシテ逆臣ニ與ミセバ、我クテマ、チニ取殺サン。此處ヨク、子々孫々ニ申傳ヘヨ。此イヤシキ身一ツステ、無勿體モ、恐多クモウレシクモ、忝クモ、今現在ニ御照ラシ遊サル此

御日様ノ御子孫様ノ

天子様ノ御爲ニ相成候事カヘス、ウレシキコトニアラズヤ。難有事ニアラズヤ。ヨク、合點スベシ。

聖人ノ國トイフカラクニモ、イク度カ夷ニトラレ終ニ極悪ルイ夷ニ取レ切ニ成タルニ、我

皇國ノミヒトリ

天照大御神様ヨリ御血統ツマキマシ、テ今日ニ至リ、天地ノアラン限り如此ナランコト、全ク不思議ノ

神國故ノコト、深ク難有忝ク心得明ムベシ。カヤウナ難有御國ニ生レ候事ナン

トナミダノ流ル、ホドウレシイコトデハナイカ。ソコヲヨク、勘考仕リ、九牛ガ一毛モ御恩ヲ報ジ奉るベシ。

カナラズ、學者ニモ、詩人ニモ、歌ヨミニモ、何ニモ成ント思ふ事狂人ノ心也。

唯々々々

補正成尊ノ如キ忠臣ニナラウト、一向一心ニ思慮ベシ。思テ修行スベシ。

無事ナル時ニハ家業ノ餘暇ニハ、他人ノ寐ル間、遊ブ間、千万ノ御恩奉謝ノ一端ニ

著述スベシ。

御國ニ事アル時ハ

御爲ニ

天神地祇ライノリ奉リ、ハカリゴトラメグラシ、事ヲ成スベシ。事アル時、書物ヲヨミ、著述ナドノミシテ、黙々としてアルハ、畜生トモ何トモ名付難シ。誠ニ學者ハ無用ナモノト思ハルベシ。

愚父ガ自歌ニ

人丸ヤ赤人ノ如イハルトモ、詠歌者ノ名ハトラジトゾオモフ

一筋ニ君ニ仕テ永世ノ人ノ鑑ト人ハ成ルベシ

其外長歌等短歌等ニヨミ置候まゝ見ルベシ。

武士トイ稱ハ、申も恐多キコトナガラ、

饒速日命無比類

神武天皇様へ御精忠被爲遊候其饒速日命御子孫へ物部ノ姓ヲ賜ヒシニヨリ、ミナ

五 佐久良東雄

・見ル「見候」ともよみ得。  
・イ稱「イフ稱」の誤。

・取レ「取ラレ」の意。

ミナ二本ザシノ武士ヲ、モノ、フト後世云フ也。然レバ、  
饒速日命ノ如クノ精忠ニ習ヒ候ベシ。然ラザレバ、モノ、フトハイハレヌ事也。  
此等ノ稱號サヘ存ゼヌモノ多ケレバ逆臣ハ絶ヌ也。ヨク／＼名ヲ正シクスベ  
シ。

カヘス、何ノ爲ニ二本サシ候ヤト申セバ、

天子ヲ守リ奉ル爲メニサス也。弓矢も同じ事也。ソレニ無御勿體

・何ナル「何  
ル」の誤。

天子ヘ向奉リテ、弓ヲヒキ矢ヲハナチ太刀ヲヌキ候事何ナルタハケ畜生ゾヤ。ヨ

クヨク勘考アルベシ。此等ノコト、何デモナク分リサウナコトニ候ヘ共分ラヌ  
奴多ケレバ、コソ朝敵逆臣も昔より多カリケレ。サテ／＼淺間敷コト也。

元來弓太刀鑑共

天子ヨリユルサレテサシテアル也。何ノ爲メニサスト云フコトヲシラズ、

天子様ノ御町人御百姓ライジメ杯スルヤツハ、イカナルモノグルヒ畜生トモ名付

ケガタシ。又ソレニ刀ノ前ヘガスマヌ杯イヒテ、リキミマハス。ムチヤトモク  
チヤトモ辨ヒガタシ。

・前「ガ」  
ガ」の意。  
・辨ヒ「辨  
ドモ」の誤。

其外第一ノ治メ方身分ニ不相應ノヤウナトモ、忠ニニツナケレバ深考アリ。口  
傳ニ云置ベシ。

いろ／＼申入度事有之候ヘ共、先右等ノ事存居候ヘバ、餘リニ當ラヌコトハシ出  
マジト存書置候也。愚父當年五十歳也。元來老少不定ノ命ニ候ヲ、老年ニ相  
成候ヘバ、明日ガ日ニモワカラヌ命也。何マデモイキ候と存じ候事、大愚人ノ意  
也。無祿ノ身何モユヅルモノナシ。タゞ此一言也。此一言サヘ心得候ヘバ、た  
とひ餓死候共、生レ來リ候甲斐有之候事ニ候。ヨク／＼味フベシ。感ズベシ。

安政七申年三月十八日夜落涙書置候也

神祇道學師平健東雄

愚息石雄ヘ

○佐久良東雄の自  
筆に據る。

# 六橋曙覽

志濃夫迺舍歌集序

橋曙覽の家にいたる詞

おのれにまさりて物しれる人は高き賤きを撰ばず常に逢見て事尋ねとひあるは物語を聞まほしくおもふをけふは此頃にはめづらしく日影あたゝかに久堅の空晴渡りてのどかなれば山川野邊のけしきこよなかるべしと巳の鼓うつころより野遊に出たりき。三橋といふ所にいたる。中根師質あれこそ曙覽の家なれといへるを聞て俄にとはむとおもひなりぬ。ちひさき板屋の淺ましげにてかこひもしめたらぬにそこかしこはらひもせぬにや塵ひぢ山をなせり。柴の門もなくおぼつかなくも家にいりぬ。師質心せきたるさまして參議君の御成ぞと大聲にいへるに驚きてうちよりしよじもの膝折ふせながらはひいでぬ。すこし廣き所に入りてみれば壁落かゝり障子はやぶれ疊はきれ雨もるばかりなれども机に千文八百ぶみうづたかくのせて人丸の御像などもあやしき厨子に入りてあり。おのれきものぬぎかへて賤が著るつゞりをりに似たる衣をきかへたり。此時扇一握

〇二月廿六日  
 (元治二年乙丑)  
 宰相君御獵の御  
 ついでおのが草  
 廬にゆくりなく  
 入らせ給へる、  
 ありがたしとも  
 いふはさらな  
 り。たゞ夢のや  
 うなるこゝちし  
 て涙のみうちこ  
 ぼれけるをうれ  
 しさのあまりせ  
 めて

賤夫も生るしるし  
 の有て今日君來ま  
 しけり伏屋の中に  
 其後御館にまう  
 のぼるべう川崎

致高主を御使と  
 して仰せことあ  
 りけれど賤しき  
 身のさるたふと  
 き御まへにまう  
 でまつらむこと  
 のせちにかしこ  
 く思ふ給へらる  
 る旨きこえまつ  
 りてかく  
 花めきてしばし見  
 ゆるもすな園田  
 廬に咲けばなりけ  
 り  
 かく聞えあげゝ  
 ればかしこくも  
 きこしめしわけ  
 きせ給ひ仰せの  
 むねゆるさせ給  
 ひけるうへに  
 すな園田ぶせ  
 の庵にさく花を  
 しひてはをらじ  
 さもあらばあ  
 れ、といふ御歌  
 あえばし給ひた  
 りけり。ゆほび  
 かなる御心ばせ  
 のかたじけな

を半井保にたまひて曙覽にたびてよと仰せたり。おのれいへらくみましの屋の名をわらやといへるはふさはしからず橋のえにしあれば忍ぶの屋とけふよりあらためよといへり。屋のきたなきことたとへむにもなし。しらみてふ虫などもはひぬべくおもふばかりなり。かたちはかく貧くみゆれど其心のみやびこそいとくしたはしけれ。おのれは富貴の身にして大夏高堂に居て何ひとつたらざることなけれどむねに萬巻のたくはへなく心は寒く貧くして曙覽におとる事更に言をまたねばおのづからうしろめたくて顔あからむ心地せられぬ。今より曙覽の歌のみならで其心みやびをもしたひ學ばや。さらば常の心の汚たるを洗ひうき世の外の月花を友とせむにつぎくしかるべしかし。かくいふは參議正四位上大藏大輔源朝臣慶永元治二年衣更著末のむゆか館に歸りてしるす。

此は正二位の君福井におはしましたしけるほどかり場にかよはせ給ふ道の行てなればとて我が父曙覽がすみかに立よらせたまひて作らせ給へるを御手づからかゝせ給へるなりけり。我父世にありしあひだ厚き御めぐみをうけしことどもあらはなるわら屋のかどよりかくろへたる心の奥までおつる事なくかくものしたまひたれば父の身にとりてはいともかたじけなくいともおもておこしになむありける。同じくは此の度梓に鏤らせつる父が歌集の

さ、言にいひ出  
べうもあらねど  
さりとしてむなし  
くやはとてたて  
まつれる  
御めぐみの露をあ  
またに戴きてすゞ  
る色そふすゞな園  
かな  
(志濃夫遇合歌  
集 君來草)

後 篇

一五〇

卷首に掲げて、世に公にせまほしく思へりし旨を御もと人して聞えあげつるに、つたなきことだにいとほざらむには、とにもかくにもとのたまひつれば、やがて御筆のまゝをかくなむ。

明治十一年六月

橋 今 滋 謹誌

春のころ、蜂のみちをつくるさまを見るに、おのがじゝこゝかしこにあかれちりてあるは櫻、あるは桃、さてはつゝじ山振何にまれはなといふ花のかぎりをいさゝかづゝつゝいばみもち歸りて軒にかけたる巢のうちに積みかさねつゝ、そのくさゞを、ひとしなに醸しなせり。こをなめ試みて櫻もてかもせるはこれ、桃もて醸せるはこれ、つゝじ山吹もてかもせるはこれ、とやうに、舌のうへに味ひの辨へられむはいまだなりをへぬなまゝのみにて、さらにうまし物といふべくもあらぬものなるをや。歌よむもこれにおなじ。おのがじゝ好めるかたを學びて、あるは萬葉あるは古今、さては千載新古今、いづれにまれ詞といふ言葉のかぎりをいささかづつ取つどへて、ひとうたにつくりなす。こを唱へ試みて、これは萬葉もてつゞれる、これは古今もてつゞれる、千載新古今もて綴れるとやうに、心のうちに姿のわきまへられむは、いまだなりをへぬなまゝの歌にて、さらにうまし言の葉といふべく

もあらぬものなるをや。されば花をついばみて醸しなすがみちにて、これやがて蜂のおのが物なり。舊きを學びてあたらしくなすが歌にて、これすなはちよみぬしのおのが物なり。そのおのがものとするわざに勤めず、萬葉古今に似せ、千載新古今に似せて、われ歌のさま得たりと誇るとも、誰かまことの萬葉、古今千載新古今をおきて似せものゝ萬葉、古今千載新古今を翫ばんやは。こしのみちの口福井のさとに橋曙覽といふ翁あり。わかき時より歌を好み、世のかぎり、こをわざとして終られけり。そのかいつみおかれし集を、家にも遺し、世にもつたへむと、予今滋ぬし、人々とかたらひはかり、かく板に鏤められけるに、おなじくは、芳樹がはし書をそへてと佐藤誠ぬし、てこひおこせられしかば、此集を開きみるに、あがたるの水をくめるにもあらず、鈴の屋の響きにしたがへるにもあらで、ひとふしある口つきのいとめづらしくおもひしまゝに、誠ぬしに、ひととなりをとひ聞くに、世のかぎりやまと魂たぢるがで、

おほやけを尊び、古へをしたふ志厚く、さいつとし天の下のみまつり事、あらたまらむとせしころは、あつしき病ひに煩ひて、今はのきはと見えたりしかど、誠ぬしが都よりのかへさに立まれるを引とどめ、袂手づからかいのけて、ありさまどもたづねき、今日こそ身のいたづきをも忘れたりけれと、よろこばれしとぞ。さるひとつ

・古へいかにし  
しいの意。

心を種として、よみ出られし言の葉どもなれば、彼似せ物のかきつをえ離れあへぬ  
かいなでの歌つくりとはこよなくて、蜜のおもむきをよく味ひしられし翁なるべ  
く、これなんおのがかねていへるこゝろはへにはかなへるとおもへるまゝに、あぢ  
きなきをさぐる言ながら、卷のはじめに記しぬ。さるはかゝるすぢはやくからうた  
につきて、もろこし人のいひふるしたることなれど、おなじことまたいはでしもあ  
らめやとて。

明治十とせといふとしの六月ついたちの日

東京四谷の寄居子庵にて

近藤芳樹識

正月ついたちの日古事記をとりて

春にあけて先看る書も天地の始の時と讀いづるかな

飛騨國富田禮彦おほやけのおふせにて去年

・かんがうる―  
「かんがふる」の  
題。

より此國の堀名といふ山里に物しをる春ば  
かりとぶらひたりけり。こゝは近きころ白  
がね出づとて、禮彦はじめて其のつかさにま  
けられておふなく、いそしみけるにより、日  
ごとにほり出だすかすおほくなりつゝ、今の  
さまにてかんがうるにつぎ、ふえゆきな  
んずるやうなりなど物がたるをきゝて

歳々にさかゆく御世の春をさて咲あらはすか白がねの花  
春さむき越の山邊に白銀の花守しつゝ、庵むすぶ君  
夜晝と手人いざなひ御つぎ物掘うがたする白がねの山

人あまたありて此わざ物しをるところ見め  
ぐりありきて

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね掘出す  
赤裸の男子むれるて鏡のまろがり碎く槌うち揮て

六橋 昭 覽

さひづるや碓たてゝきら／＼とひかる塊つきて粉にする  
 笥かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる  
 黒けぶり群りたゝせ手もすまに吹鑠かせばなだれ落るかね  
 鑠くれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉  
 銀の玉をあまたに宮に收れ荷緒かためて馬馳らす  
 しるがねの荷負る馬を牽たてゝ御貢つかふる御世のみさかえ

紙漉

家々に谷川引て水湛へ歌うたひつゝ少女紙すく  
 水に手を冬も打ひたし漉きたてゝ紙の白雲窓高く積む  
 紙買に来る人おほしきねかづら這まとはれる垣をしるべに  
 黄昏に咲く花の色も紙を干す板のしろさにまけて見えつゝ  
 鳴たつる蟬にまじりて草たゝく音きかするや紙すぎの小屋  
 梳れくる岩間の水に浸しおきて打敲く草の紙になるとぞ

獨樂吟

たのしみは三人の兒どもすく／＼と大きくなれる姿みる時  
 たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時  
 たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時  
 たのしみは草のいほりの薙敷ひとりこゝろを静めをるとき  
 たのしみは意にかなふ山水のあたりしづかに見てありくとき  
 たのしみは珍しき書人にかり始め一ひらひろげたる時  
 たのしみは數ある書を辛くしてうつし竟つゝとちて見るとき  
 たのしみは人も訪ひこす事もなく心をいれて書を見る時  
 たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外に能くかけし時  
 たのしみは神の御國の民として神の教をふかくおもふとき  
 たのしみは戎夷よろこぶ世の中に皇國忘れぬ人を見るとき

そゞろによみいでたりける

人臭き世にはおかざる我がこゝろすみかを問はゞ山のしら雲

美豆山の青垣山の神樹葉の茂みが奥に吾魂こもる

父の十七年忌に

今も世にいまされざらむよはひにもあらざるものをあはれ親なし  
髪しろくなりても親のある人もおほかるものをわれは親なし

今とし父の三十七年母の五十年のみたまま

つりつかうまつる

顯はさむ御名はかけても及びなし身の恥をだに残さずもがな  
なにをして白髪おひつゝ老けむとかひなき我をいかりたまはむ  
いひがひもなき身のうへをわび泣て御墓のもとにうづくまるかな  
みいかりをなごめまつらむすべなきをくりごとしつゝよと泣くかな  
柞葉のかげに五十の翁さびのこるかひなき霜の下くさ

赤心報國

眞荒男が朝廷思ひの忠實心眼を血に染て焼刃見澄す  
國のため念ひ瘦つる腸を筆にそむとて吾世ふかしつ  
仇に向き腕たゞきけむ古人にならひてこそは國に仕へめ  
正宗の太刀の刃よりも國のためするどき筆の鋒揮みむ  
國を思ひ寝られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな  
國汚す奴あらばと太刀抜て仇にもあらぬ壁に物いふ  
松葉の夜おつるにも耳たてつ枝ならさざる世とはおもへど

高山彦九郎正之

大御門そのかたむきて橋上に頂根突きけむ眞心たふと

贈正三位正成公

湊川御墓の文字は知らぬ子も膝折ふせて嗚呼といふめり

贈正三位正成公

一日生きば一日こゝろを大皇の御ために盡す吾家のかぜ

内宮にまうでゝ

おはしますかたじけなきを何事もしりてはいとゞ涙こぼるゝ

御ひかりを朝夕うくる御めぐみは身を粉にすともむくひえられじ

・むくひー「むく  
す」の誤。

人にしめす

眼前いままも神代ぞ神無くば草木も生じ人もうまれじ

・つかふまつるー  
「つからまつる」  
の誤。

公につかふまつるつねのおきてとなるべき

歌よみてくれよと人にこはれて

世の中の憂きに我身を先だてゝ君と民とにまめ心あれ

小木捨九郎主に

大皇の醜の御楯といふ物は如此る物ぞと進め眞前に

武士

尊かる天日嗣の廣き道踏まで狭き道ゆくな物部

真心といはるべしやは眞こゝろも正しき道によらで盡さば

大綱と天日嗣を先とりてもろくの目を編む國と知れ

天皇に身もたな知らず真心をつくしまつるが吾國道

失題

何わざも吾國體にあひあはず痛く重みし物すべきなり

恐るべし末世かけて國體に兎毫ばかりも疵のこさじと

潔き神國風けがさじとこゝろくだくか神國の人

示人

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはゞかしこみまつれ

太刀佩くは何の爲ぞも天皇の勅のさきを畏むため

天下清く拂ひて上古の御まつりごととに復るよろこべ

大御政古き大御世のすがたに立かへりゆく  
べき御いきほひと成ぬるを、賤夫の何わきま  
へぬ物から、いさましう思ひまつりて

百千歳との曇りのみしつる空きよく晴ゆく時片まけぬ  
あたらしくなる天地を思ひきや、吾目昧まぬうちに見んとは  
古書のかつゝ、物をいひ出る御世をつぶやく死眼人  
廢れつる古書ども、動きいで、御世あらためつ時のゆければ

前編 初句索引

(巻数・国歌大觀番號) 本文頁數

あかときと (七・二三三)…………… 七  
 あかねさす (三・一六六)…………… 三  
 あきつかみ (六・一〇〇)…………… 三  
 あきののけ (一・四六)…………… 一  
 あきはぎを (九・一七〇)…………… 四〇  
 あさかやま (一六・三六七)…………… 八三  
 あさひてるさだのをかへに  
 なくとりの (二・九二)…………… 一四  
 むれみつ (二・一七)…………… 一三  
 あさひてるしまのみかどに (二・八九)…………… 一四  
 あさなぎに (六・九四)…………… 三三  
 あしはらの  
 みづほのくには (三・三三三)…………… 八一  
 みづほのくにを (一八・四〇四)…………… 三三  
 あしひきの

初句索引 (あ)

やつをのうへの (一九・四三六)…………… 二五  
 やまがはのせの (七・二〇八)…………… 六  
 やまにものにも (六・九七)…………… 七  
 やまのまてらす (一〇・一六四)…………… 七  
 あなしがは (七・二〇七)…………… 六  
 あふみのうみ (三・三六)…………… 一九  
 あまぐも (一九・四四七)…………… 七  
 あまぐもを (九・四三三)…………… 八  
 あまざかる  
 ひなのながぢゆ (三・三三)…………… 三  
 ひなをさめにと (七・三三三)…………… 四  
 あまとぶや (二・一〇七)…………… 四  
 あまのはら (二・四)…………… 一〇  
 あまはしも (三・三三三)…………… 六  
 あめつしの (三・四四六)…………… 六  
 あめつちと  
 あひさかえむと (九・四三七)…………… 三  
 とみにをへむと (二・一七)…………… 三  
 あめつちに  
 すこしいたらぬ (三・三六三)…………… 四

たらはしてりて (九・四七)…………… 六  
 あめつちの  
 かみをいのりて (三・四三)…………… 六  
 とほきがごとく (六・三三)…………… 三  
 ともにひさしく (五・八四)…………… 九  
 はじめのとき (一・一七)…………… 一  
 わかれしときゆ (三・三三)…………… 六  
 あめつちを (三・四六)…………… 二  
 あめなるや (三・三三)…………… 六  
 あめのした (七・三三)…………… 七  
 あめはれし (一〇・九七)…………… 七  
 あもと同じも (三・四七)…………… 六  
 あらたしきとしのはじめの (三・四三)…………… 六  
 あらたしきとしのはじめに  
 おもふどち (九・四四)…………… 七  
 とよのとし (七・三三)…………… 七  
 あられふり (三・四三)…………… 六  
 あをうなばら (三・四三)…………… 七  
 あをによし (三・三六)…………… 三

う

いづみかは (三三三三三)……………三  
 いとこなせのきみ (六六六六六)……………六  
 いにしへのゆ (六・一〇四)……………六  
 いはそそぐ (八・一四八)……………七  
 いはとわる (三四二九)……………八  
 いはほすら (二二二二六)……………三  
 いはみなる (二二二二)……………六  
 いはみのうみ (二二二二)……………六  
 いはみのや (二二二二)……………六  
 いめにだに (二二二二)……………二  
 うもとくば (三三三三三)……………三  
 うまかはば (三三三三三)……………三  
 うまのおとの (二二二二二)……………三  
 うめのはな (五五五五)……………三  
 うらうらに (一九四四四)……………三

う

うりはめば (五八〇〇)……………三  
 おきつしま (六九二〇)……………六  
 おきつなみ (九四四四)……………七  
 おくららは (三三三七)……………四  
 おほうみに (七二九九)……………六  
 おほきみのとほのみかどと (三三三三)……………三  
 おほきみのみことかしこみ  
 あをぐむの (四〇四四)……………七  
 いそにふり (五五五五)……………七  
 おほあらしの (三三三三)……………六  
 おほのうらを (四〇四四)……………六  
 おほぶねの (三三三三)……………六  
 ゆみのみた (四〇四四)……………七  
 おほきみの  
 みことにまれば (五五五五)……………七  
 むつたまあへや (五五五五)……………七  
 おほきみはかみにしませば  
 あまぐもの (三三三三)……………八

お

まきのたつ (三三三三)……………三  
 おほきみはときはたまきび (二二二二)……………二  
 おほとも  
 とほつかむおやの (二二二二)……………二  
 みつのまつばら (五八六六)……………七  
 おほぶねに (九四四四)……………七  
 おほみやの (三三三三)……………三  
 か  
 かからむと (二七五五)……………七  
 かぐはしき (四〇四四)……………七  
 かけまくは (五八三三)……………六  
 かしまねの (六六六六)……………四  
 かすがのに (九四四四)……………四  
 かすがのの (四〇四四)……………三  
 かはづなく (八・一四三)……………三  
 かみより (五八六六)……………三  
 からくにに (九四四四)……………三  
 からくろも (四〇四四)……………三

く

くまかえの (四四四四)……………五  
 けいろもを (二二二二)……………四  
 けふよりは (二〇四四)……………五  
 こ  
 ここにありて (四四四四)……………五  
 こぞのはる (八・一四〇)……………七  
 こぞみてし (二二二二)……………七  
 ことしゆく (七・二二二)……………六  
 こととはぬ (六・一〇〇)……………六  
 このみゆる (二六四三)……………七  
 このゆふに (四〇四四)……………七  
 このをかに (七・二九九)……………四

け

きさはひの (七・一四二)……………四  
 ききむりに (四〇四四)……………六  
 きくらだへ (三二七七)……………六  
 きさなみの  
 しがのおほわだ (二・三三)……………六  
 しがのからさき (二・三〇)……………六  
 ささのはは (二二二二)……………六  
 さすたけの (六六六六)……………六  
 さをしかの  
 つまとのふと (四〇四四)……………六  
 むなわけにかも (八・二九九)……………六  
 し  
 しきしまの  
 やまとのくにに (四〇四四)……………七  
 やまとのくには (三三三三)……………六  
 したのちは (四・三九九)……………四  
 しはつやま (三二七七)……………六  
 しまのみや  
 うへのいけなる (二二二二)……………三

こ

ここにありて (四四四四)……………五  
 こぞのはる (八・一四〇)……………七  
 こぞみてし (二二二二)……………七  
 ことしゆく (七・二二二)……………六  
 こととはぬ (六・一〇〇)……………六  
 このみゆる (二六四三)……………七  
 このゆふに (四〇四四)……………七  
 このをかに (七・二九九)……………四

き

きさはひの (七・一四二)……………四  
 ききむりに (四〇四四)……………六  
 きくらだへ (三二七七)……………六  
 きさなみの  
 しがのおほわだ (二・三三)……………六  
 しがのからさき (二・三〇)……………六  
 ささのはは (二二二二)……………六  
 さすたけの (六六六六)……………六  
 さをしかの  
 つまとのふと (四〇四四)……………六  
 むなわけにかも (八・二九九)……………六  
 し  
 しきしまの  
 やまとのくにに (四〇四四)……………七  
 やまとのくには (三三三三)……………六  
 したのちは (四・三九九)……………四  
 しはつやま (三二七七)……………六  
 しまのみや  
 うへのいけなる (二二二二)……………三

す

まがりのいけの (二二二二)……………三  
 しらくもの (六六六六)……………三  
 しらたまは (六六六六)……………三  
 しるがねも (五五五五)……………三  
 すみのえに (九四四四)……………七  
 すみのえの (三三三三)……………七  
 すめろぎの  
 しきますくにの (八四三三)……………七  
 とほのみかどとからくにに (五五五五)……………七  
 とほのみかどとしちぬひ (四〇四四)……………六  
 みよさかえむと (八四三三)……………七  
 みよよるづよに (九四四四)……………七  
 そらみつ  
 やまとのくにに (九四四四)……………七  
 やまとのくには (九四四四)……………七

そ

た

たかひかるわがひのみこの  
 いましせば (二・七三) ..... 三  
 よろづよに (二・七三) ..... 三  
 たぎのうへの (六・九七) ..... 三  
 たくづのの (三・四六) ..... 六  
 たごのちらゆ (三・三八) ..... 六  
 たちごもの (二・四三) ..... 六  
 たちばなの  
 したてるにはに (八・四九) ..... 三  
 しまのみやには (二・七) ..... 三  
 とをのたちばな (八・四八) ..... 三  
 たちばなは (六・一〇九) ..... 三  
 たなぐもり (二・二六) ..... 二  
 たびとへど (二・四八) ..... 二  
 たびにして (三・七〇) ..... 二  
 たびびとの (九・七七) ..... 〇  
 たまだすき (二・九) ..... 一七  
 たらちねの (二・三三) ..... 一七

ち

ちちのみの (九・四六) ..... 三  
 ちちははえ (二・四四) ..... 六  
 ちちははが (二・四四) ..... 六  
 ちちははも (二・四三) ..... 六  
 ちちははを (五・八〇) ..... 六  
 ちはやぶる (二・四四) ..... 六  
 ちよろづの (六・九七) ..... 三  
 つぎねふ (三・三三) ..... 四  
 つきまちて (八・四〇) ..... 三  
 つくひやは (二・四三) ..... 六  
 つるぎたち (二・四三) ..... 七  
 つれもなき (二・二七) ..... 二  
 と  
 とときどきの (二・四三) ..... 六  
 とくらたて (二・一〇) ..... 一

ち

とこよへに (九・七四) ..... 八  
 とこよもの (八・四〇) ..... 三  
 としのはに (六・九八) ..... 三  
 とどめえぬ (三・四六) ..... 八  
 とよくにの (三・四八) ..... 八  
 な  
 なにはづに  
 みふねはてぬと (五・八九) ..... 六  
 よそひよそひて (二・四三) ..... 六  
 なにはびと (二・六三) ..... 三  
 ならやまの (六・六六) ..... 八  
 ぬばたまの  
 よのふけぬれば (六・九五) ..... 二  
 よるさりければ (七・一〇) ..... 六  
 は  
 はなはだも (二・三三) ..... 一

は

はるくきは (六・九八) ..... 二  
 はるすきて (二・二六) ..... 二  
 はるのその (九・四三) ..... 二  
 はるののこ  
 かすみたなびき (九・四九) ..... 七  
 こころのべむと (二・八八) ..... 一  
 すみれつみにと (八・四四) ..... 七  
 はるのひの (九・四九) ..... 七  
 はるびすら (七・三三) ..... 七  
 ひさかたの  
 あまぢはとほし (五・八一) ..... 七  
 あまろとひらぎ (二・四四) ..... 七  
 あめのかぐやま (二・八二) ..... 七  
 あめみるごとく (二・二六) ..... 二  
 あめゆくつきぎ (三・四〇) ..... 七  
 ひとつまつ (六・一〇四) ..... 六  
 ひとひには (二・二八) ..... 二  
 ひとみなは (二・三三) ..... 六

ふ

ひなみしの (二・四三) ..... 一  
 ひむがしの  
 たぎのみかどに (二・一八) ..... 一  
 のにかざろひの (二・四八) ..... 六  
 ひるみれど (三・二七) ..... 六  
 ふ  
 ふちはらの (二・三三) ..... 二  
 ふゆごもり (二・二) ..... 七  
 ふゆすきて (二・八八) ..... 七  
 ふるゆきの (七・三三) ..... 七  
 ま  
 まきはしら (二・二九) ..... 二  
 まくさかる (二・四七) ..... 五  
 まくすはら (二・三九) ..... 六  
 まけばしら (二・四四) ..... 六  
 まさきくと (二・三三) ..... 七  
 ますらをの  
 こころおもほゆ (六・四九) ..... 六

み

みかのはら (六・一〇五) ..... 二  
 みたちせし  
 しまのありを (二・一八) ..... 一  
 しまをみるとき (二・七) ..... 三  
 しまをもうへと (二・一〇) ..... 一  
 みたみわれ (六・九八) ..... 二  
 みづつたふ (二・二八) ..... 一  
 みづとりの (二・三三) ..... 六



喜  
年  
內  
存  
悖

内

広島大学図書

2000027621

